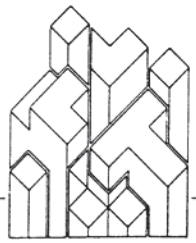
モノグラフ
中学生の世界
vol. 20

# 中学生にとっての権威

～目標喪失社会の中での成長～



## 目次


特集●権威喪失時代の若者たち……深谷昌志……2

調査レポート●中学生にとっての権威
～目標喪失社会の中での成長～……深谷昌志 佐々木智子 畠山滋……6

本報告書の概要……6

テーマ設定……6

第Ⅰ章　ヒーローの不在

1．著名人たちの影響度……8
2．タレントへの没入度……14

第Ⅱ章　尊敬する人物をめぐって

1．尊敬する人物とは……20
2．頼りになる相談相手……23

第Ⅲ章　社会観、将来像と権威

1．現代的な自己像と悩み……28
2．社会的達成の見通し……31
3．社会観との関連……35
4．家庭第一主義の将来像……37

まとめに代えて……40

資料1　調査票見本……41
資料2　学年・性別集計表……53

特集

# 権威喪失時代の若者たち

放送大学教授　深谷昌志

## 若者から怒りが消えた

一昔前まで、若者と怒りとが同義語だったような気がする。怒れる若者たちといえば良いのであろうか、社会矛盾に敏感で、不正を憎み、肩を怒らせて、エスタブリッシュメントに対決しようとするのが若者らしさのあらわれであった。

俗に、アンチ巨人は、裏返しの巨人ファンだという。巨人の勝敗に一喜一憂し、こだわりをもっているという意味では、たしかに、一種の巨人ファンなのであろう。それと同じように、怒れる若者も、既存の社会体制を意識し、社会体制にまきこまれまいとツッパっ

ているという意味でのアンチ体制派となる。それと同時に、既存の社会的な価値を反面教師として、それと異質な生き方をしようとしているので、怒れる若者は、目標をもつ生き方をしているといえよう。

もちろん、歴史的にとらえると、そうした怒れる若者の以前に、自分たちの力で、未来を担おうとする若者の姿がみられる。司馬遼太郎の『坂の上の雲』には松山で青春を過ごした3人の若者の姿が描かれている。3人は、坂の上の雲を目指して向上心に燃えた生活を送っており、それが、正岡子規、秋山好古、秋山真之となる。彼らは、文字通りの青雲の志を抱いており、日本の未来を自分たちの手で築こうという使命感が強い。現在でも発展途上国の大学などでそうした意欲に燃えた若者を見ることができる。

しかし、社会が発展するにつれて、それまでのように、若者の力を求めなくなる。それだけに、若者は自分の力を発揮できないことへのいらだちと、既成の社会のもっているさまざまな矛盾に対する反発とが重なった形で冒頭でふれたような怒れる若者の姿となる。

石原慎太郎の描く『太陽の季節』に登場する若者が、その代表であろうが、残念ながらそうした怒れる若者は、学園紛争を最後に姿を消して、若者たちは怒りをあらわにしなくなった。

それでも、庄司薫の『白鳥の歌なんか聞こえない』や『ぼくの大好きな青髭』などで活躍する薫くんは、反抗をあらわにしないにしても、心の奥底には若者らしいナイーブさを残している。

しかし、三田誠広の『僕って何』になると、本人が、自分の心をとらえにくくなり、さらに、田中康夫の『なんとなくクリスタル』に登場する若者は、感覚のままにただよう感じとなる。

つまり、外面だけでなく、心の内でも、怒りがあらわにならず、自分の存在そのものを問う態度が薄れてゞる。伝統的に、若者らしさとはアイデンティティの確立だといわれてきた。しかし、アイデンティティに関心をもつことなく、外部の刺激に反応するだけの若者が登場している。

さらに、日野啓三の『天窓のあるガレージ』に描かれている青年は、がらんとしたガレージの中で、スチール製の机やラジカセに囲まれ、ハードロックやシンセサイザーに聞き入る生活を送っている。

こうした書き方をすると、なにやら極端な生活のように思われるが、『天窓のあるガレージ』や『なんとなくクリスタル』は、けっしてまれな姿ではない。

このところ、若者たちの心をとらえたものにどんなものがあったのか、こころみに列挙してみよう。ヘッドフォン・ステレオをはじめとしてカセット、タウン誌、ビニ本、テレビゲーム、パソコン、バイクなど、いずれもひとりで時を過ごすために作られたものが多い。

ヘッドフォン・ステレオを耳にしていれば、それなりに自分の世界が広がってくる。そして、満ち足りた感覚も味わうことができる。なにも無理をして人とふれ合う必要はないのである。

しかも、今年、成人式を迎えた青年は、東京オリンピックの年に生まれ、幼稚園のころ大阪万博を見て育った人たちである。当然、もの心がついたときにテレビが存在していた。いわば、テレビを子守り唄代わりに育ってきている。さらにいうなら、テレビは彼らにとっては孤立を慰めてくれる友でもあった。

そして、中学生になれば深夜放送がテレビにとって代わる。さらに、ラジカセもあればマンガ雑誌もある。

こう考えてくると、現代の青年たちが、人間的な絆をもつことなしに、いわば自閉化された育ち方をしているのに気づく。しかも彼らは、テレビやマンガ、ラジカセなど、さま

ざまなものに囲まれて生活しているので、孤独さを感じないですむ。孤独とみるのは、おとなからの見方にすぎない。

このところ、モラトリアムやピーターパン、そして、オブローモフなど、青年のさまがわりが、さまざまな切り口から伝えられることが多いが、それらの変化は、上述したような青年たちの自閉状況を背景として登場してきたものと考えられる。

## 達成意欲の薄さ

このように、現代の若者は、自分の身の回りの中に埋没した生活を送っており、権威とは無縁といった生活のスタイルで毎日を過ごしている。もちろん、どの社会にせよ、権力機構をもたないはずはないのであるから、一見したところ、権威不在に思えても、その実、より大きな権威が若者たちを囲んでいる。その存在を若者たちが気づいていないというような構図も考えられよう。

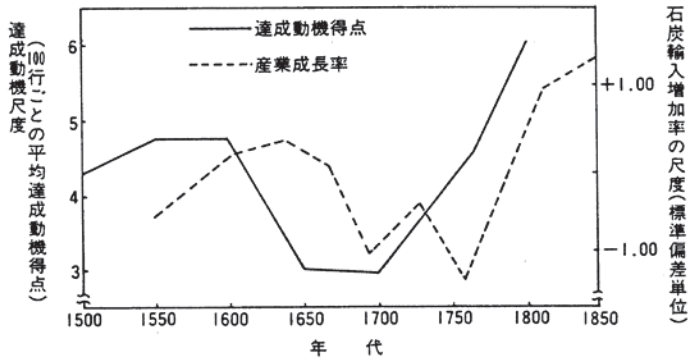
権威との距離を、若者のサイドからとらえ直すと、専門用語を使えば、達成動機となる。現在では、日常的にもなじみの深いこの概念は、1953年ころからハーバード大学の D.C. マクレランド、ミシガン大学の J.W. アトキンソンらによって行われた達成動機の研究に源を発する。中でもマクレランドは、この動機を各国の経済成長を説明するための重要な媒介概念としてとらえ、分析を重ねている。

マクレランドのやり方は文学作品や国語教科書を集め、それを一定の方法で分析することによって、各時代の達成動機を測定する。そして、これと、発電増加量、石炭輸入増加量などにあらわれた経済成長率との関連をみようとするのである。たとえば、図は、イギリスのチュードル王朝から産業革命までの期間について行われた分析結果であるが、図に明らかなように、両者は密接な関連を示している。すなわち、ファンタジーの中に投影されたその時代の国民の達成への意欲（達成動機の強さ）が、その後少し時期をずらして、経済の繁栄という形をとって現れていることがわかる。

しかしこれら達成動機の強弱が、何によってもたらされるかについては、いまひとつ明確な説明がされていない。「人種」「風土」などの要因は、マクレランド自身が言うように、ばくぜんとしており、「社会的、経済的、政治的不利益」も十分な説明力はもっていない。

日本の場合にてらして考えてみても、明治時代は、全体として、進取のいきごみに燃え、

**イギリスの文学作品から測定された達成動機得点と50年後の産業成長率との関係**
（林　保編著『達成動機の理論と実際』誠信書房1968より）




（注）達成動機得点＝100行あたり達成動機心像の数の平均。
産業成長率＝ロンドンにおける石炭転入高増加率、平均増加率からの偏差（標準偏差単位）でもって示す。

人々の間にやる気があふれていた。そして、そうしたやる気が、時間をずらした形で、生産性の向上をもたらすという説明は納得しやすい。

日本の近代化は外圧に触発された形で急速な過程をたどった。遅れた形で出発したそうした情況が、人々に緊張感をもたらし、それと同時に、遅れを取り戻そうとする意欲を生みだす。そうした意味では、遅れの意識や相対的な不足感が、やる気を支えるというのも可能であろう。

もう一度、マクレランドに戻ると、彼は、達成意欲を個人のレベルに還元し、達成動機の個人差がすでに5歳ごろから認められることを指摘している。そして両親が、出生以来子どもをとり扱うしかたの蓄積によって、意欲の強弱が定まるという仮説を提示している。

たしかに、身の回りを見回してみても、子どもを励まし、目標へ向けて、子どもが努力する態度を育てる母の姿もあるし、中には、そうした働きがうまいといいにくい母も見受けられる。したがって、達成意欲は、巨視的にみると、国民性といった角度からとらえるのも可能だが、微視的には、親の養育態度の所産ともいいうる。

## 孤独な中学生

しかし、達成動機の研究は、仮説が先回りし、実証が、仮説についていっていない印象を受ける。それだけに、今後の研究が必要だが、もう一度、権威の問題へ論点を戻すなら、豊かな情報社会の到来は、不足感や遅れを感じさせない情況を作り出したので、当然、人々の中から、やる気が薄れてこよう。それと同時に、権威に無関心をよそおう成長のスタイルも増加してくる。

テレビのスイッチをひねれば、世界の動きが刻一刻と家庭の中にとびこんでくる。テレビのCMで流された製品が、近くのスーパーマーケットに並んでいる。マンガ雑誌とテレビとキャンディ・メーカーとが連動するかたちで、マンガのキャラクターが、子どもの周辺をいろどる。そして、昨年来のように、イギリスで行われたバンド・エイドの活動が、日ならずして、日本のテレビにうつり、そして、カセットも入荷する時代である。そうした意味で、青少年の視野は、地球的な規模に広がっている。しかし、そうした反面、身近な生活に目を転ずると、地域に根をおろした子どもの世界が失われたのに気づく。つまり、マス・メディアを媒介として、広い世界が子どもの前に広がった。しかし子どもたちの行動半径は、家庭や学校の中に閉ざされる傾向にある。社会の拡大と行動半径の縮小といういわば二極化現象の中で、受身の生活を送っているのが現代の青少年ではないだろうか。

アメリカの社会学者・リースマン(D. Riesman)が、大衆社会状況の到来を予告しながら、『孤独な群衆』を著したのは、1950年であった。この名著の中で、リースマンは、一見はなやかに見える大衆社会に住む人びとの心は孤独で、たよるべき人を見いだせない不安に包まれていると述べた。そして、伝統的な価値観に準拠することもできず、そうかといって、自分の価値判断にも自信をもてないから、結局、他人の価値観に身を寄せる「他人志向型」社会が生まれるといっている。

リースマンの描いたのは、1940年代のアメリカの市民たちの生活だが、現代の日本の中学生たちも、社会的な権威へは距離の遠さを感じ、かといって、マスコミのスターに同一化することもできず、娯楽の対象としてのテレビに孤独をいやそうとしている。

拡大されていく社会と対照的に、自分の身を寄せる場の縮小が目立つ。そうした情況下にある生徒たちが、権威をどうとらえているのか。あらためて、掘り下げてみようとしたのが本レポートである。テーマが大きいので、分析の不十分な面も目につくが、達成動機などとの関連の中で、今後さらに、分析を進めたいと思う。

●調査レポート

# 中学生にとっての権威

～目標喪失社会の中での成長～

放送大学教授
深谷昌志
お茶の水女子大学大学院生
佐々木智子
千葉県立上総高校教諭
畠山　滋

## 本報告書の概要

**①有名人のようになりたいか**

なりたい人物のトップにあがったのはビートたけし。それでも「なりたい」「なってもよい」と答えたのは27%で、ほとんどの著名人に対して、まったく知らないか、知っていてもなりたくないと答えている（P.10図1）。

**②有名人のようになれるか**

またそうした人たちのようには、自分ががんばってもなれるように思っていない。生き方のモデルとして、有名人たちが意識にのぼっていない様に考えられる（P.11図2、P.12図3、P.13図4）。

**③好きな歌手・タレントに対する感情**

その中でも比較的なりたいと思われているお笑いタレントやアイドル歌手についても、なんとなく身近に感じられる憧れの対象ではあるが、自分自身の目標にするほどの思い入れはもっていない（P.15表1、P.19図11・図12）。

**④尊敬する人**

尊敬しているのは両親が圧倒的に多い。しかしながら相談相手として頼りになるかといえばそうではなく、父親も成長の糧となる権威の存在ではないように思える（P.22図13、P.25図14）。

**⑤自己像と悩み**

自分たちを、明るく、小さいことにはこだわらない、個性的な子ととらえている。日常は「自分の本当にやりたいことは何か」「おとなになったらどう生きようか」などとけっこう考えている（P.29図16、P.30図17）。

**⑥社会的達成**

家庭、子育て、仕事とも、まあまあやれると思っているが、「人々から尊敬」されたり、「社会的に大活やく」したりできると考えているのは13～14%にすぎない。一流の職業人になれると思っている生徒も1割に満たない（P.31図18、P.33図20）。

**⑦社会観**

今の日本の社会は、競争がはげしく、金持ちの意見が通りやすい社会で、正直者は損をしているととらえている。社会に対して、きびしくダーティなイメージが、見受けられる（P.36表3）。

**⑧将来の生き方**

55%が「家庭のしあわせを何より大事にする」としている。家庭中心で、のんびりマイペースという生き方が志向されている。この傾向は、男女や成績によらず一貫している（P.37図23、P.38図24、P.39図25）。

## テーマ設定

社会的な目標をもちにくい時代といわれる。社会全体が安定期に入り、人々の生活も豊かになるにつれ、誰もがまあまあの満足を得られる時代となった。また、社会組織も発達し、

ひとりの人間が社会を揺り動かしたり、人に抜きん出た活やくをすることが困難に思える世の中でもある。こうした、ある意味でこじんまりと安穏な生活の中で、ハングリーさをもたない若者たちが育ちつつあるように思う。

激動期の社会であれば、若者も「今の社会を何とかしなければ」と思う使命感ももてたであろうし、生活が苦しければ、そこから何とかはいあがりたい、との欲求も生まれたことだろう。高度経済成長以前の日本はまさしくそういう社会であった。そうでなくとも「若者」につきまとうイメージは、いつも何か満たされず、現状を否定し、何か新しい社会を創造する、活気あふれる存在であった。そして、そういう若者たちは常に自分のめざすべき、なかなか越えようとしても越えられないビッグな目標をもっていたように思う。それは、ある人にとっては伝記上の偉人であり、ある人にとっては教師であり、社会で第一線にある人々であろう。

しかし、現在の若者たちは「カプセル人間」と称されるように、自分だけのイメージの世界に満足し、何かの目的に向かってがむしゃらに突っ走るような生き方をカッコ悪いと考えている者が増加している。こうした若者たちは、自分たちの生き方のモデルを何に求め、成長の糧をどこから得ているのであろうか。

本レポートではこのような問題意識から、とりわけ子どもからおとなへと大きく変化する時期の若者予備群としての中学生にとって、彼らの成長に影響をもつ、「権威」は存在するのかどうか、また、存在するのならば、それはいったい誰なのか、どういう影響力をもっているのか等を、探ろうとする。

権威には、有名なウエーバーの3種類の権威の外、種々の定義が与えられているが、ここでは、中学生にとっての「権威」の意味づけを、次のように考えていきたい。

一つには、生き方のモデルとしての「権威」があげられよう。つまり、「あのように生きたい、あのような人になりたい」と、憧れ、尊敬する対象としての権威である。この人に自分を同一視し、真似ることで成長を遂げ、最終的にはその人を越えることが一人前のおとなになることを意味する、そのような権威をもつ存在が、今の中学生に果たしてあるのかどうか。

今一つは、そうした個人のレベルを離れて、権力や威信をともない、社会的に認められたエスタブリッシュメントとしての権威がある。広く考えれば、社会秩序に近いが、それは、ときには打ち破るべき敵としての存在であり、ときにはめざすべきはるかな目標であったりする。中学生たちはそのような「権威」をどのように感じ、どう捉えているのだろうか。

中学生にとっての権威はいったい何なのか、というテーマは、現実の中学生を見る限りでは、あまりに漠然としていて捉えどころがない問題のようにも思えるが、彼らの成長のあり方を考える上で、重要な部分を占めると思い、分析を進めることにした。

**サンプル数**

(人)

| 学年 / 性 | 1 年 | 2 年 | 3 年 | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 男 子 | 330 | 308 | 343 | 981 |
| 女 子 | 257 | 279 | 284 | 820 |
| 計 | 587 | 587 | 627 | 1,801 |

**調査概要**

対象●千葉、神奈川、東京の中学1、2、3年生1,801名
期間●昭和59年12月
方法●学校通しによる質問紙調査

# 第Ⅰ章 ヒーローの不在

## 1．著名人たちの影響度

将来何になりたいか、どのような人になりたいか、と問われたとき、普通思いうかぶのは、社会の第一線で活やくする人々の名であろう。少なくとも一昔前までは、テレビや、本の中でしか知らない著名人たちに、いつかこのような人たちのように、と思いをはせる子どもたちが一般的であったように思う。その気になれば、容易に多量の情報をマスコミから入手できる今の子どもたちの目には、有名人たちはどのような存在としてうつっているのだろうか。

図1はマスコミでおなじみの20人の有名人について、「そのような人になりたいか」どうかをたずねた質問の回答結果である。「ぜひなりたい」と答えた者の多い順に項目を並べてあるが、「ぜひなりたい」者は、トップにあがっている「ビートたけし」ですら10%、「なれたらなってもよい」を含めても30%に満たない。全体に「あまりなりたくない」「まったくなりたくない」者が圧倒的に多い。

知名度からいくと、知っているのはほとんどタレントで、政治家では中曽根首相だけ、文化人では松本清張、林真理子くらいである。そう見てくると、彼らの視界に入っている対象はかなり狭い範囲に限定されているように思えてくる。

「ぜひなりたい」「なれたらなってもよい」の数値に着目してみると、極端に落ちこんで

いるのは、知名度の低い者に多い。しかし中には大橋巨泉や松本清張、田中康夫、林真理子など、知名度が高いにもかかわらず、「なりたくない」とされる人物もいる。どうやらこうした有名人、とくに文化人たちは、生き方のモデルとして、中学生たちには魅力ある存在にうつっていないように見える。

次に、同じ20人の有名人たちに対して、「一生懸命がんばったら次のような人のようになれるか」と質問した結果を**図2**で見てみよう。図では同じく、「きっとなれる」と答えたパーセンテージの多い順に並べた。図1と比較してみると、同じような順位になっているが、図2のほうは、図1よりも知名度の高い順にきれいに並んでいる。しかし数値を見ると、1位から20位まで「きっとなれる」と「なれるかもしれない」を合わせても、非常にわずかな差しか開いておらず、「有名人たちのようにはとうていなれるはずがない」と、最初からあきらめてしまっている中学生の姿がみられる。また、それほど思い入れがなく、がんばってみようという気もおこらないのかもしれない。

それでは次にその中でも比較的なりたいと思われているのはどのような人なのか、上位にあがってきた項目について詳しく見てみよう。男子と女子とでは当然憧れる対象の性質が違ってくるものと思われるので、**図3**、**図4**では、「ぜひなりたい・なれたらなってもよい」の数値と「きっとなれる・なれるかもしれない」の数値をとり出して重ね合わせたものを、男女別に示した。

男子では「なりたい」の1位が「ビートたけし」35%、2位が「中曽根康弘」27%、3位「手塚治虫」25%、以下タモリ、江川卓、所ジョージと続いており、ここまでが20%を超えている。この中の6名中3名がお笑いタレントであり、今の男の子たちにとってお笑いタレントのもつ影響力が少なくないことを考えさせられる。世の中を揶揄することを得意とするこうしたお笑いタレントは、自分たちが少々がんばったくらいではびくともしない社会に対して、自分たちにかわって嘲笑を送ってくれる、力強い代弁者なのかもしれない。彼らのうっ屈した反応心や欲求不満がそこに隠されてはいないだろうか。一方で、中曽根康弘が2位にあがっているのは興味深い。社会に対し、影響力をもちたいと願う気持ちが、やはり男子の中にはあるようである。しかし、なれるかどうかは別問題で、「きっとなれる・なれるかもしれない」の割合は少ない。

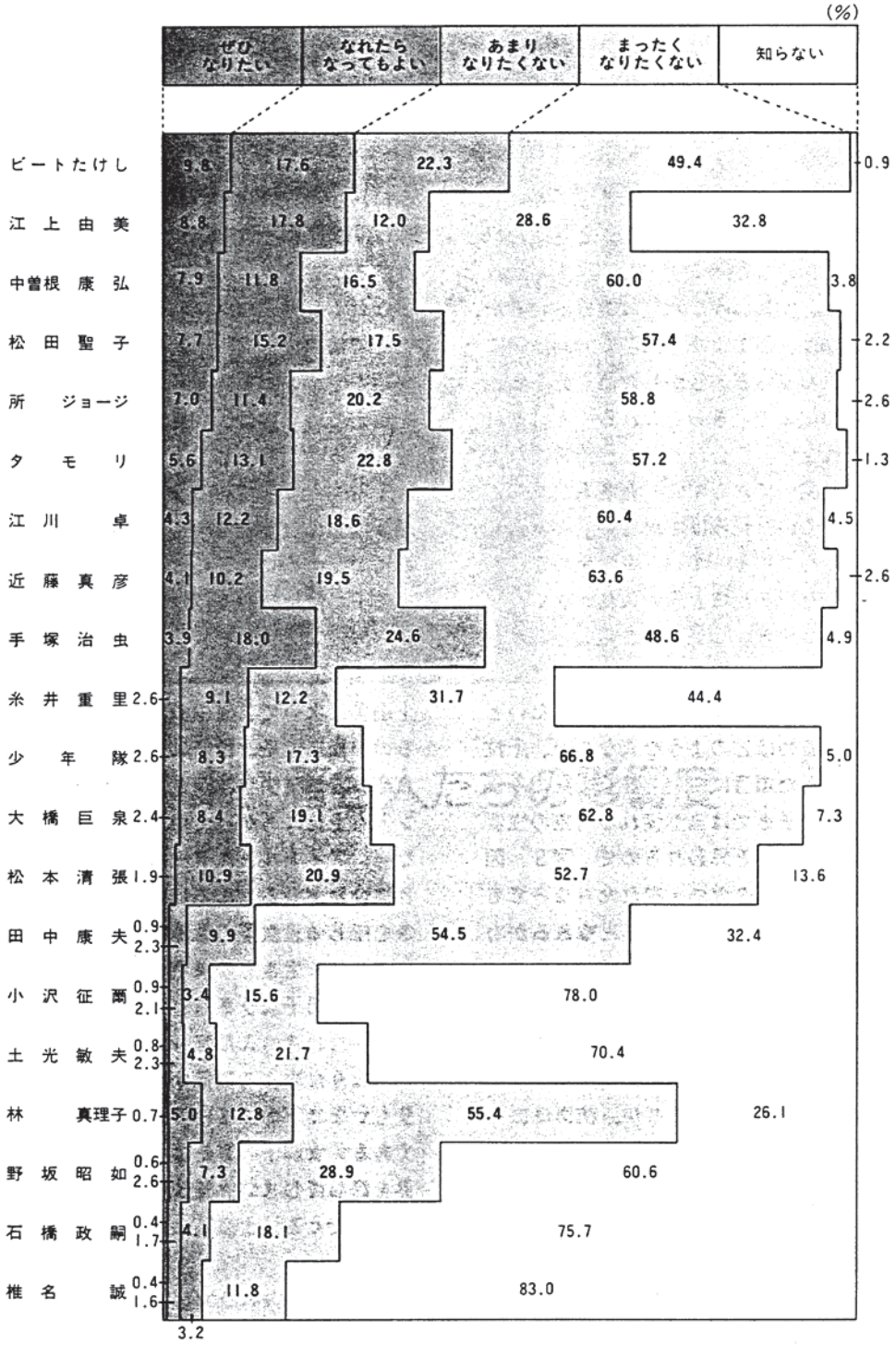
その他、江川卓や手塚治虫のようなスポーツ選手やマンガ家になりたいと思う子が2割を超えているのは、10年前と同じような印象を受ける。だが、これもなれると思っている子は1割強となっている。全体に、なりたいと思うほどにはなれないものだ、と悟りきった心情がほのかにみえるような感じがする。

男子では比較的下位に位置しているが、女子の間では圧倒的な人気を得ているのが、アイドル・タレントである。スポーツ選手の江上由美に次いで、僅少差で2位にあがっているのが松田聖子、数値は落ちるが4位に近藤真彦、6位に少年隊がきている。お笑いタレントも上位にあがっているが、男子ほどではない。アイドル・スターのような華やかな世界に憧れているところはまだまだ子どもらしさを感じる。女子の数値は1位、2位に集中しており、生き方のモデルを有名人に求めない傾向は男子よりさらに強いといえそうである。

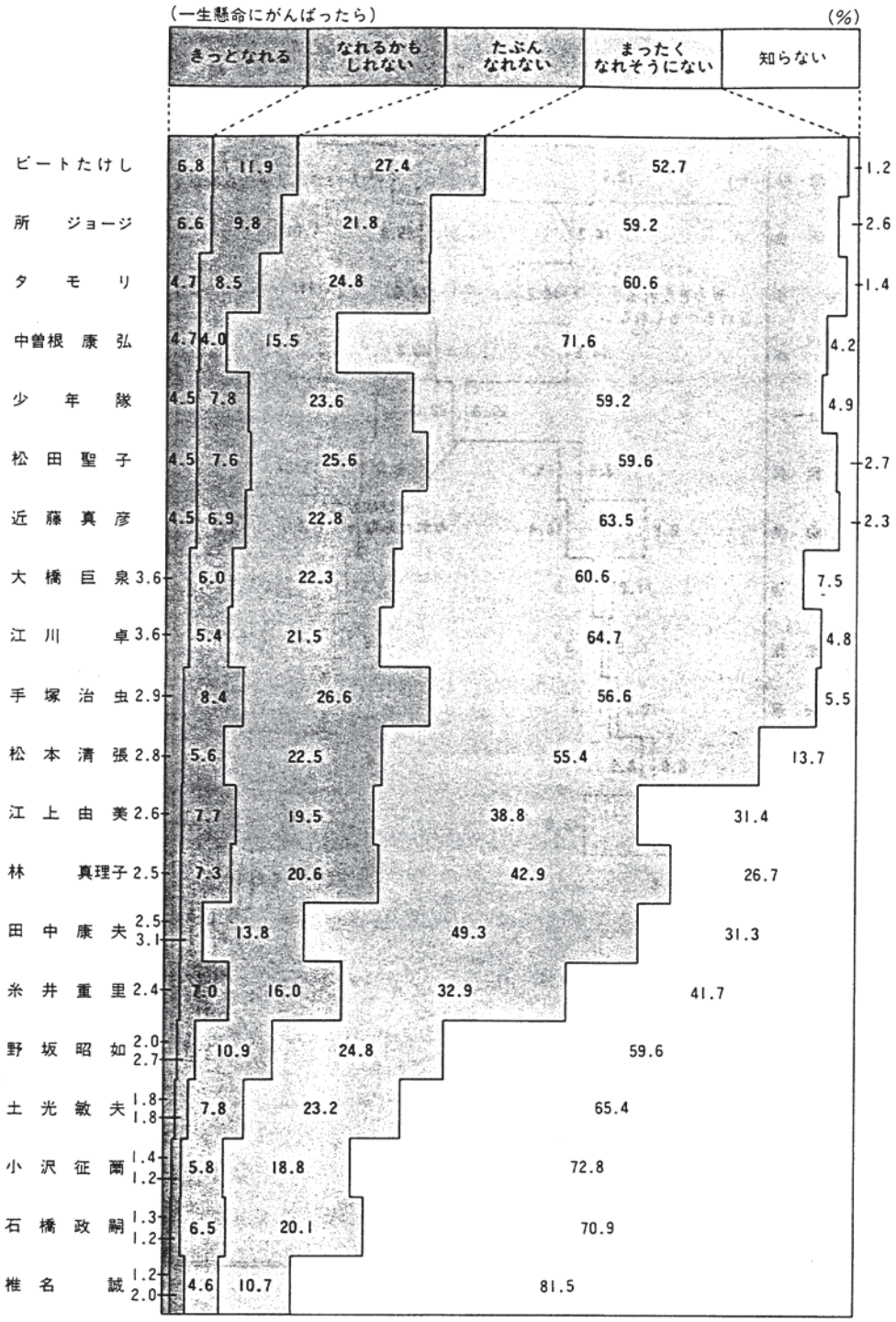
「なりたい」の数値が「なれる」の数値よりもかなり下がっているのも、女子に特徴的である。女の子の方がより自分に最初から限界を課してしまい、達成をオリている様子がうかんでくる。

（図１）有名人のようになりたいか

→あまり知らないし、なりたくもない

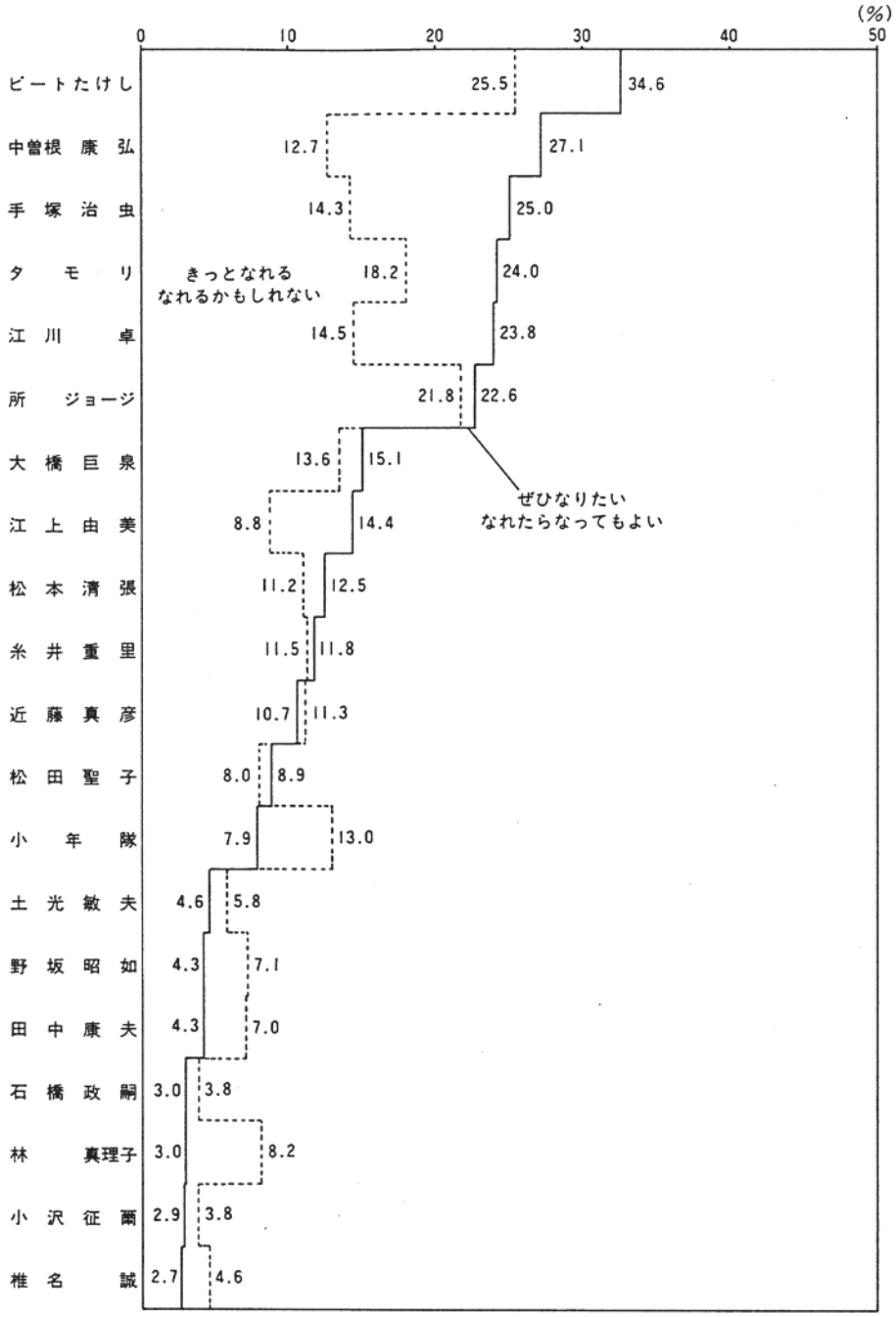


（図２）有名人のようになれるか

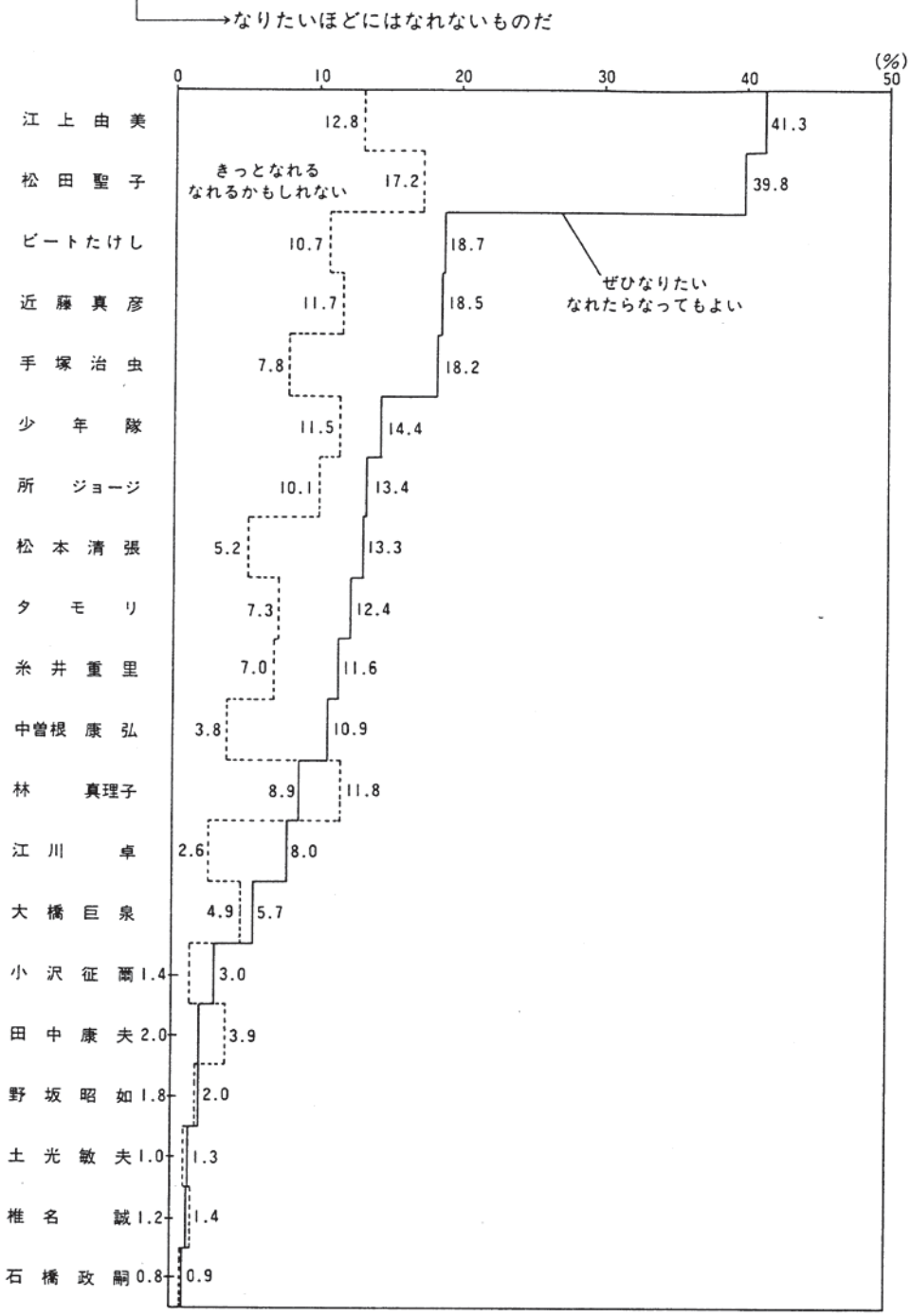


（図３）有名人のようになれるか・なりたいか(男子)

→なりたい人のトップはビートたけし



（図４）有名人のようになれるか・なりたいか（女子）



# 2．タレントへの没入度

男子ではお笑いタレントが、女子ではアイドル歌手が、「なりたい」人物像として浮上してきた。中学生ころといえば、好きな音楽やミュージシャン、歌手、俳優、タレントなどに入れ込む子が増えだす時期でもある。こうした好きなタレントに対して、彼らはどの程度の思い入れがあるのだろうか。ここでは彼らの文化の重要な側面を担っていると思われる「好きな歌手、タレント」に対する中学生の態度を追ってみることにしたい。

まず**表1**は、オープン・アンサー形式で、「好きな歌手、タレント」を書かせてみた結果の一部である。やはり男子のトップには「ビートたけし」があがっており、続いて「小泉今日子」、「菊池桃子」、「中森明菜」と、いわゆる可愛子ちゃん歌手が並んでおり、上位16名中9名に女の子のアイドル・タレントが入っている。海外のポップス系アーチストとしては「Duran Duran」だけが男女とも上位にあがっている。ただ、全体に数字が非常に分散しており、オープン・アンサーに記入したのが男女合わせて400名あまりであったが、数多くのタレントの名があがり、ほとんどが1名ないしは2名の者が好きと答えているタレントであった。その中には海外のポップス系歌手や映画俳優、ニュー・ミュージック系のシンガー・ソング・ライター、ロック歌手、テレビ俳優などの名が連なっている。一概に中学生の好きなタレントといっても多様で、分化している様子が表れている。

女子ではトップが「チェッカーズ」で、2位が「中森明菜」、3位が「松田聖子」、4位、5位が「シブがき隊」、「吉川晃司」となっており、異性として憧れを抱く若い男性歌手と、同一化する夢の対象としての同性アイドル歌手が入り混じっている点が、男子と異なる点である。女子でもお笑いタレントの名が見られるが、男子ほど順位が高くはない。

さて、それではどうして、こうしたタレントを好きになったのか、タレントたちに寄せる中学生たちの感情がどのようなものかを**図5**で見てみよう。

まず「やさしそう」が第1の理由である。次いで、おもしろくて歌がうまくてカッコいい。親しみやすいことも人気の条件の1つである。このように、「まじめそう」ではなく、あまり「努力している」ようにも見えない、こうした身近に感じられる憧れの人たちに対して、生徒たちは努力目標としての位置づけを与えにくいのではないか、といった印象を受ける。

男子と女子とではファンになるタレントの傾向が異質であったので、この「ファンになった理由」を男女別にみると(**図6**)、女子の人気を集めるには何より「やさしそう」で「カッコよく」なければならないことがわかる。女子の思い入れの深さに対して男子のタレントに対する評価は、それほど高くない。40%を超えているのは「おもしろい」の項目のみである。そして男女とも共通しているのは、「まじめそう」の項目で、極端に数値が低い点である。彼らの憧れの対象となるにはコツコツ地道にがんばる努力型ではかえって「ダサく」てだめなのかもしれない。

なお、そうした対象への執着を、期間の形で調べてみると、ファンになったのも1年くらい前からか、せいぜい2～3年前で、移り変わりの早いのも今のアイドルの特色であろう(**図7**)。彼らが永遠のヒーローであったり、一生めざすべき目標の人であったりすることは、まずないのかもしれない。

それでは好きなタレントたちへの入れ込み度はどの程度のものか、1つの尺度として「好きなタレントについて知っていること」をた

ずねてみた。図8には、半数以上の者が「知っている」「だいたい知っている」と答えたのは、年齢、及び出身地であるという結果が得られている。これも図9で男女別にみると、やはり女子に思い入れの深さが見られ、好きなタレントに関しては、好みに関してまで知っていると答えた者が、半数近くに及んでいるが、男子のほうは、それほど興味ある対象ではないらしく、女子と20%近くの差を見せている。

同じくファンに対する熱中の度合を今度はファン行動という次元で捉えてみた。その結

（表1）好きなタレント（オープン・アンサーで上位にあがったもの）

→お笑いタレント、アイドル歌手が好き

男子

| 順位 | タレント名 | 人数 |
|---|---|---|
| ① | ビートたけし | 20 |
| ② | 小泉今日子 | 12 |
| ③ | 菊池桃子 | 9 |
| ④ | 中森明菜 | 7 |
| ⑤ | アルフィー | 6 |
| ⑤ | 原田知世 | 6 |
| ⑤ | 明石家さんま | 6 |
| ⑧ | Duran Duran | 5 |
| ⑨ | 松田聖子 | 4 |
| ⑩ | 堀ちえみ | 3 |
| ⑩ | 薬師丸ひろ子 | 3 |
| ⑩ | タモリ | 3 |
| ⑩ | 岡田有希子 | 3 |
| ⑩ | 南こうせつ | 3 |
| ⑩ | YMO | 3 |
| ⑩ | 石川秀美 | 3 |
| ⑩ | ⋮ | |

女子

| 順位 | タレント名 | 人数 |
|---|---|---|
| ① | チェッカーズ | 25 |
| ② | 中森明菜 | 13 |
| ③ | 松田聖子 | 12 |
| ④ | シブがき隊 | 10 |
| ④ | 吉川晃司 | 10 |
| ⑥ | アルフィー | 6 |
| ⑦ | 近藤真彦 | 5 |
| ⑦ | タモリ | 5 |
| ⑦ | 薬師丸ひろ子 | 5 |
| ⑦ | 小泉今日子 | 5 |
| ⑦ | Duran Duran | 5 |
| ⑫ | 原田知世 | 4 |
| ⑫ | ビートたけし | 4 |
| ⑫ | The good-bye | 4 |
| ⑮ | 柴田恭兵 | 3 |
| ⑮ | 明石家さんま | 3 |
| ⑮ | 河合奈保子 | 3 |
| ⑮ | 中村雅俊 | 3 |
| ⑮ | 一世風靡セピア | 3 |
| ⑮ | 田原俊彦 | 3 |

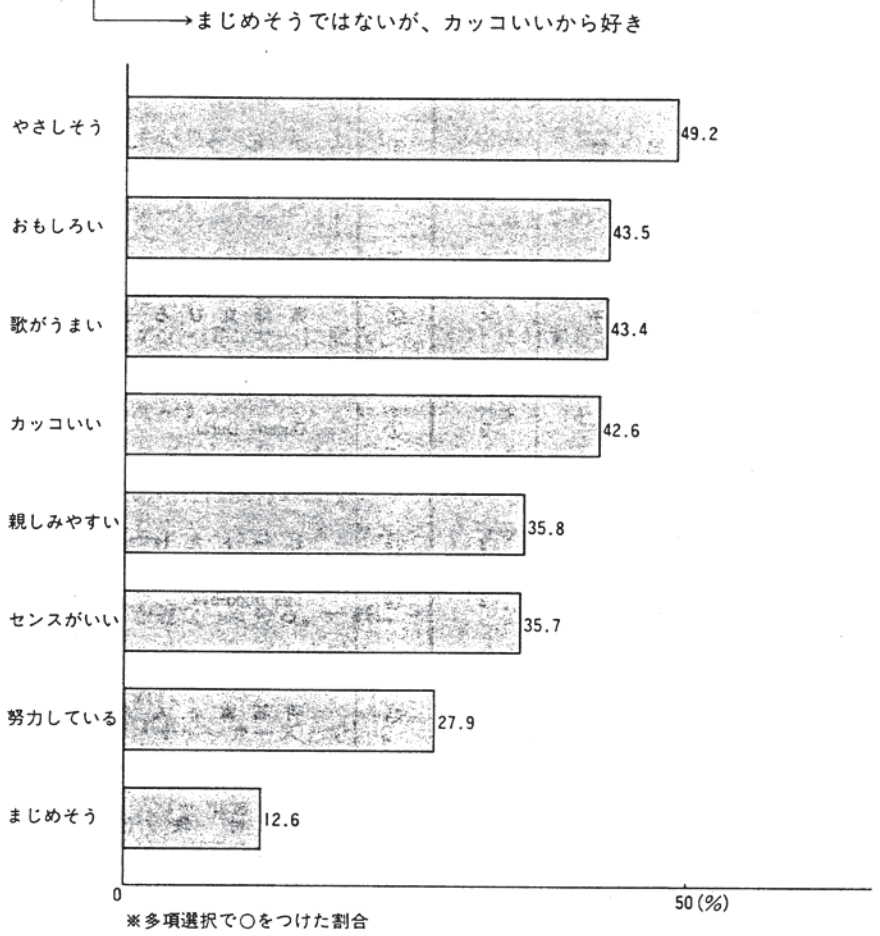
果が図10である。中学生たちの一般的なファン行動としては、「出演番組をなるべく見る」(「必ず見る」+「わりとよく見る」で88%)、「ポスターや写真を持っている」(「たくさん集めている」+「少し持っている」で66%)どまりで、ファンを増やしたり、サインを求めたりするところまで入れ込んでいる子は一部であることがわかる。さらにコンサートに行ったり、ファンクラブに入ったりするほどの熱狂的なファンはごく少数でしかない。

こう見てくると、中学生たちが「なりたい人」にあげたタレントたちではあるが、こうしたタレントたちが彼らの生き方のモデルとなる権威たりうる存在なのかどうかは、かなりあやしい雰囲気が漂ってくる。そこで次にそのものズバリ、彼らはタレントたちに尊敬の念を抱いているのであろうか。

図11では好きなタレントたちに対する尊敬の度合を示した。「とても尊敬している」者は2割程度と多くないものの、「わりと尊敬している」「少し尊敬している」を合わせると、7割の者がほどほどの尊敬を彼らに与えていることが読みとれる。

従来われわれが「尊敬」という言葉を使うときには、何となくおかしがたい神聖なイメージの伴う畏敬の念と、彼のいうことなら何でも信じられ、一目置いて耳を傾けるという、信頼、存在感、影響力の大きさの意味あいを

（図5）歌手、タレントのファンになった理由



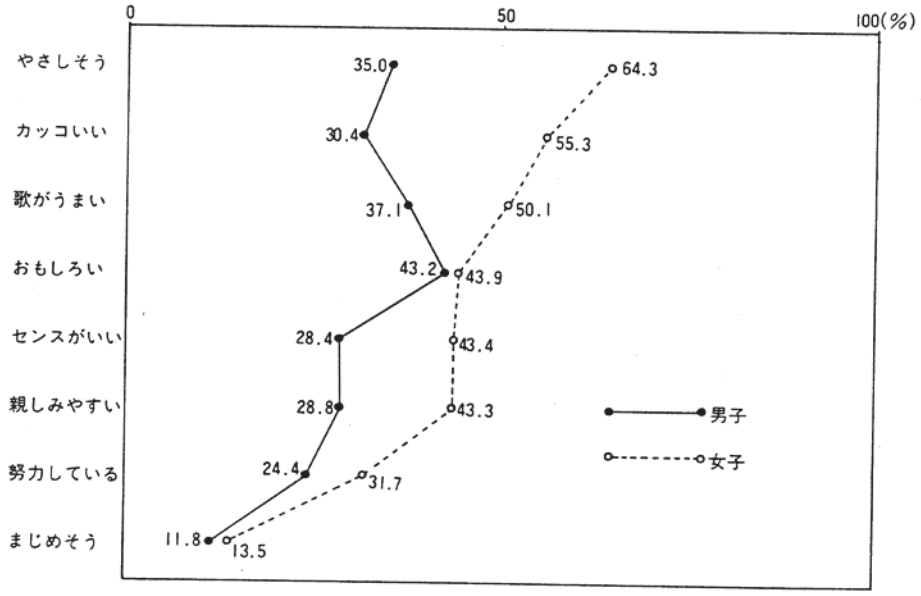

※多項選択で○をつけた割合

含んでいた。しかし、中学生たちが「尊敬」するというのは、もっと軽い意味をもっているのではないかという疑問がわいてくる。カッコよくておもしろく、どうもあまりまじめには見えず、入れ込み度もさほどでないスターたちに「まあまあ尊敬している」と答えているのは、「尊敬」とは「好き」が少し昂じた程度の感情をさしているのではないかとの印象を抱くからである。

それを裏づけるようなデータが図12である。自分の好きなタレントのように「とてもなりたい」子は比較的少数である。多くの子が「わりとなりたい」「少しはなりたい」程度の軽い思い入れであり、「べつになりたいと思わない」と答えた子も少なくない。図11、図12ともに、あまり男女差がないのも興味深い。憧れの気持ちが直ちに生き方のモデルとはつながってこないようである。好きなタレントたちは大いに関心をひく人物ではあっても、現実に直接彼らの生き方、考え方に影響を及ぼすわけではなく、あくまでも現実から離れた夢の存在でしかないのかもしれない。つまり想像の自己イメージを豊かにし、ナルシシズムを満足させる上では大いに役立っても、彼らの向上意欲をそそり、彼ら自身の内面を変えていくだけの存在意義はもたないように感じられる。

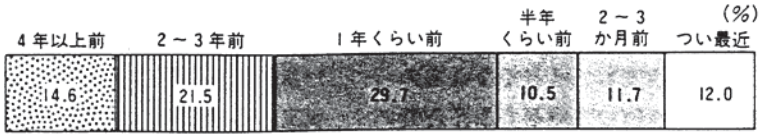
（図6）ファンになったわけ×性別

→女子にはやさしさ、男子にはおもしろさが人気の秘訣



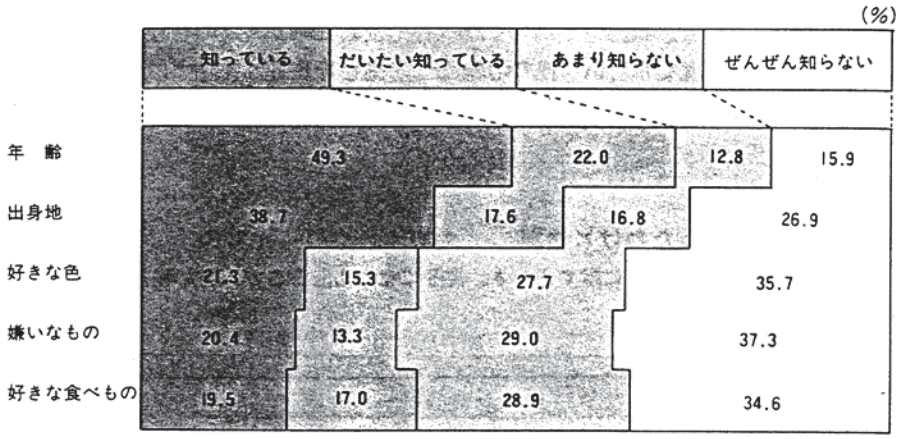
（図7）ファンになった時期

→1年から2～3年くらい前から



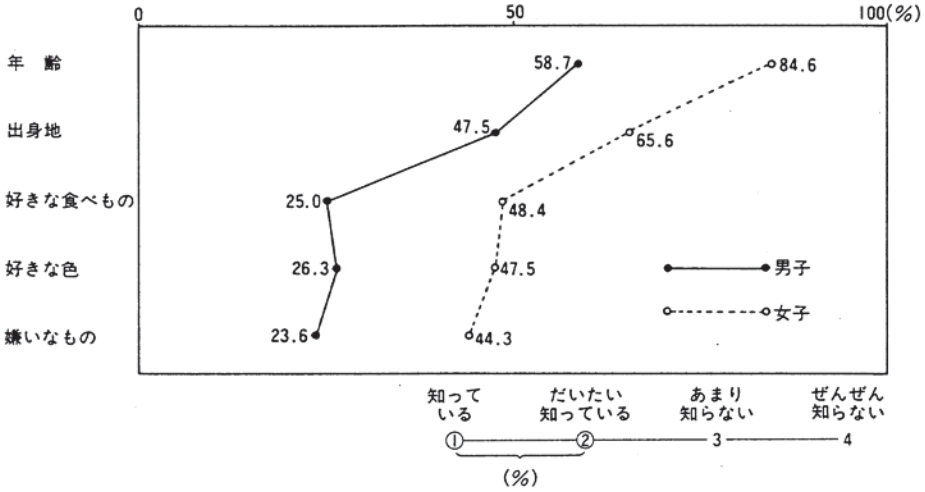

（図8）好きな歌手、タレントについての知識

→年齢、出身地くらいは知っている



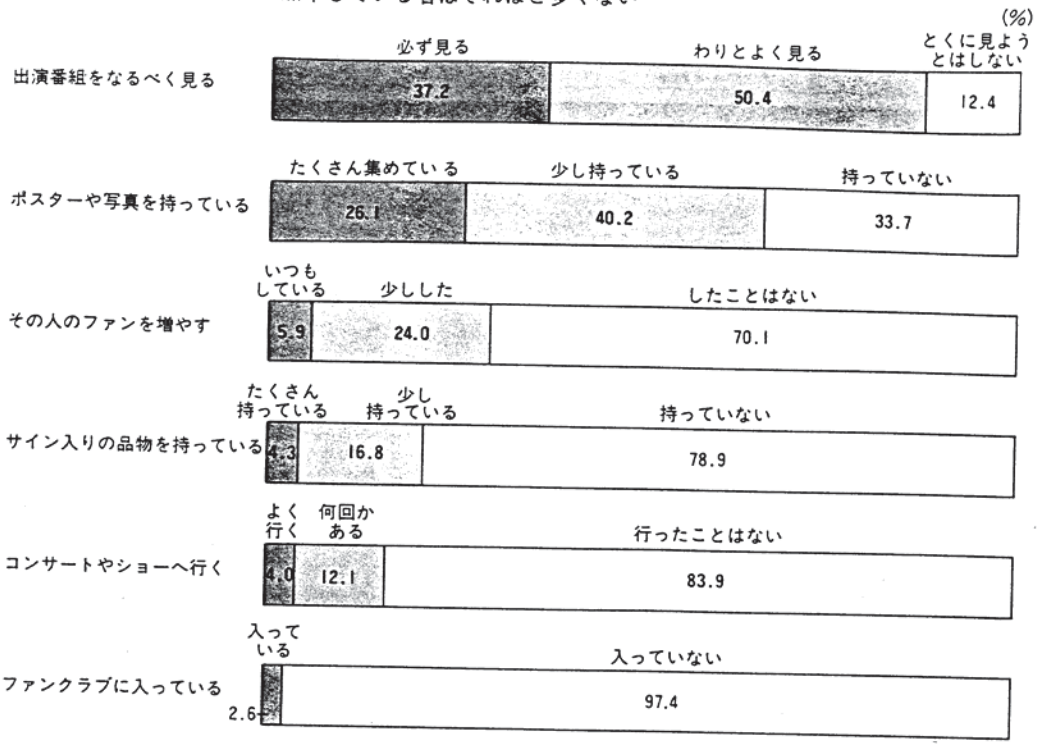

（図9）好きなタレントについて知っていること

→男子より女子のほうが知識量が多い



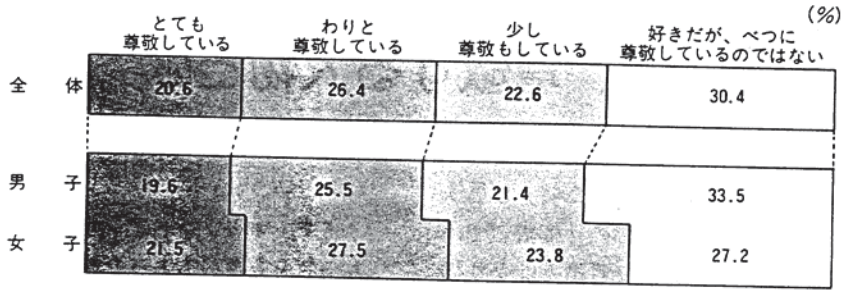
（図10）好きな歌手、タレントに対するファン行動

→熱中している者はそれほど多くない



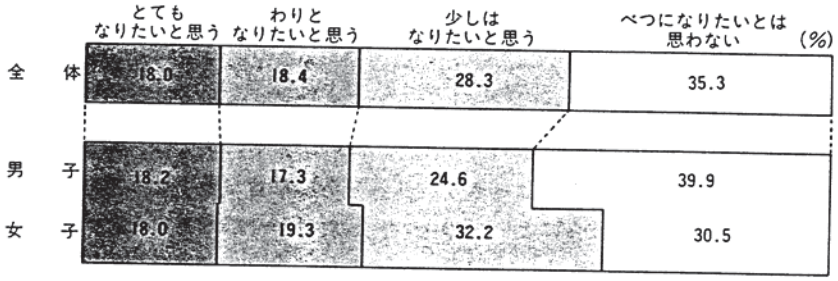

（図11）好きなタレントを尊敬しているか

→まあまあ尊敬している




（図12）好きなタレントのようになりたいか

→少しはなりたいと思う



# 第II章 尊敬する人物をめぐって

## 1．尊敬する人物とは

第Ⅰ章では、中学生の「なりたい」と思う人物というのは本当の意味での「権威」ではなく、彼らにとっての切実な目標とはなり得ていないことを指摘してきた。それでは彼らは何によってアイデンティティをかち得ているのか、とても不可思議な気がする。思春期にあってそろそろ「自分とはいったい何なのか」「自分はどのような方向に進んでいったら良いのか」と、模策し始める時期に、彼らは自分たちの生き方の示標をどこに求めようとしているのだろうか。彼ら自身がはっきり意識してはいなくても、何か彼らにとっての「権威的存在」がありはしないかという問題をもう一歩掘りさげ、データを通して考えていきたい。

まず、オープン・アンサー形式で尊敬する人の名をあげてもらった結果をまとめてみた。**表2**をご覧いただきたい。ここでも様々な名があがり、中学生たちの関心が多岐に分かれていることがわかるが、主なものを大きくまとめると、家族、身近な人々、偉人、タレント、スポーツ選手、作家その他の6群に分かれた。1つの項目に数字が集中したものは少ないが、その中では、両親、父親、先生の名をあげた者が多くなっている。表2では記入した者が一部であったため全体の傾向を読みとりにくいので参考程度にとどめておき、次の図13にうつろう。

図13では、1項目選択で12のカテゴリーの中から尊敬する人物を選んでもらった。圧倒的に多かったのが「両親」であり、29%、次いで「父親」10%、スポーツ選手、テレビタレント、偉人と続いている。なぜか「母親」だけを選んだ者は少ないが、「両親」「父親」「母親」を合わせると、44%の者が、尊敬しているのは親だと答えている。父親の権威の失墜と巷間で言われていることが、まったくあてはまらない結果が、これまでのわれわれの調査（例えば『モノグラフ・中学生の世界』vol. 10中学生の父親～新しい父親像の誕生～参照）で得られてきたが、ここでもその傾向を確認できる。

しかし、その尊敬の中身について詳しく調べてみたい。前章で中学生にとっての「尊敬」はわれわれの使う意味とは少し異なる、軽い言葉ではないかと述べた。同じく図13の下にあげた「尊敬する人のようになりたいか」の回答を見ると、やはり「尊敬」にはさほど深刻な重みは感じられないのである。尊敬しているとはいっても「ぜひそうなりたい」と思っているのは26%と、約4分の1。多くの者は「少しそう思っている」程度である。「尊敬」の語には少しは敬意を払っていて、まあまあよくやっていて偉いと思う、自分もその程度にはがんばりたいと考えている、といった受けとめ方をしている子が多いように感じられる。

**（表2）尊敬する人**

（　）内は男・女別実数

**家　族**

両　親（18、9）・父（17、13）・母（3、10）
祖　父（0、3）・兄弟姉妹（1、1）etc. 計（40、38）

**身近な人々**

先　生（11、25）・上級生（3、6）・友　人（5、3）
etc.　計（21、35）

**偉　人**

福沢諭吉（6、2）・野口英世（4、0）
聖徳太子（2、2）・夏目漱石（0、3）
ヘレン・ケラー（0、3）・ナイチンゲール（0、2）
豊臣秀吉（2、0）・坂本龍馬（2、0）
etc.　計（31、21）

**タレント**

ビートたけし（5、1）・坂本龍一（2、3）
チェッカーズ（0、3）・本田恭章（1、2）
松田聖子（0、3）・中森明菜（0、2）
etc.　計（34、27）

**スポーツ選手**

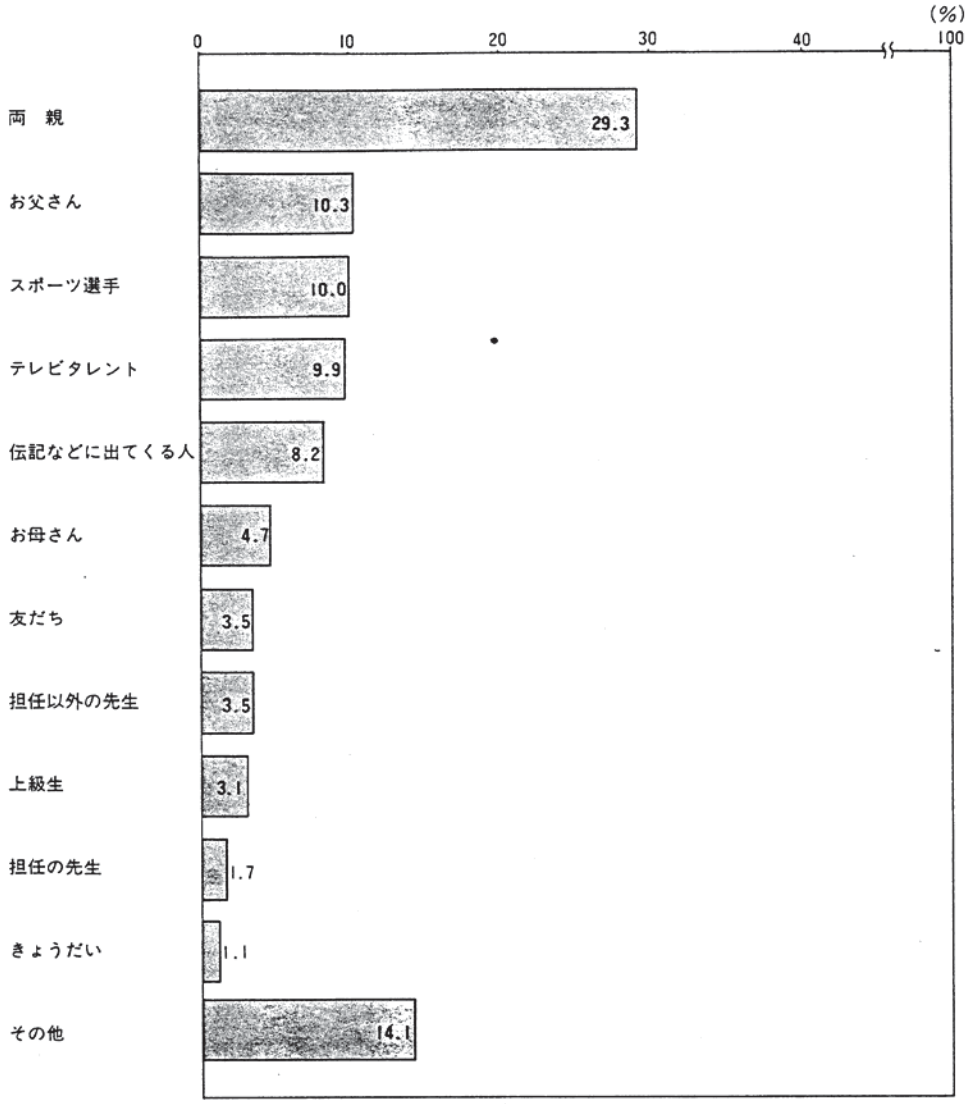
山下泰裕（3、2）
杉本公雄（2、3）
江上由美（1、2）
アントニオ猪木（3、0）
王　貞治（2、1）
ペ　レ（2、0）
三屋裕子（0、2）
etc.　計（21、16）

**作家・その他有名人**

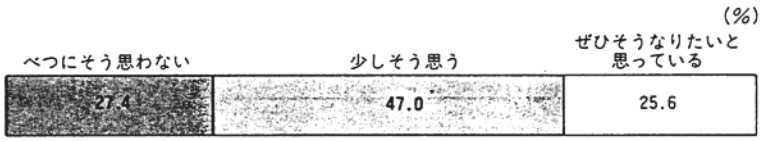
江戸川乱歩（3、0）
新井素子（0、3）
F. スペンサー（2、0）
J. クストー（2、0）
三島由紀夫（0、1）
与謝野晶子（0、1）
森村　桂（0、1）
etc.　（11、8）

（図13）尊敬する人

→尊敬するのは両親、スポーツ選手、タレント




尊敬する人のようになりたいか



# 2．頼りになる相談相手

図14ではこうした尊敬の対象との心理的関係を具体的に探ってみようと思う。父親、母親、担任の先生、友人、タレント、専門家といった人物がどれだけ自分にとって信頼に足る人々であるかを、「勉強の仕方」「高校進学」「向いている仕事」「交友関係」の4つの角度から、相談にのってくれて役に立つかというきき方で捉えようとした。

最初に「父親」からみていくと、あれほど「尊敬」されている父親でありながら、他の人々と比べ、信頼の位置づけは必ずしも高くない様子が読みとれる。高校進学や仕事、将来の相談でも半数前後、交友関係になると22%しか、相談しても役に立つとは思っていない。それに比べると母親のほうがまだ相談相手として信頼されている数値があがっている。とくに進学や交友関係については、父親よりかなり高い数値があがっており、現実に相談にのっているのは母親のようで、心理的関係の強さがうかがわれる。

しかし、勉強の仕方や進学については、やはりその道の専門家たる担任教師のほうが、より相談相手として役に立つと考えているらしい。実際に相談にいく生徒は少ないと思われるが、相談にのってもらえれば勉強の仕方で68%、進学については73%の子どもが役に立つアドバイスを得られると思っている。マスコミ等では教師に反発する生徒ばかりのように報じられているが、こうしたデータを見ると、子どもたちは教師に対して、一応の権威を感じているのではないかと思われる。交友関係についても39%の者が役に立つと答えており、父親より数値が高い。

しかし交友関係に関しては、友だちどうしで相談し合うのがいちばんだと子どもたちは考えているようで、(4)「仲の良い友だち」の交友に関する相談はかなり役立つと考えている子が多い。勉強の仕方についても友だちへの信頼度は高い。

そうした一方、タレントたちについてはかなりの関心を示していた中学生たちであったが、このような形で信頼度を測ると、勉強の仕方、進学、仕事等、相談してもあまり役立つものではないと考えているようで、6人中では最も低い数値があがっている。ここでもスターたちは自分の心を満足させる憧れの対象であって、仮に相談にのってくれたとしても、現実には自分たちの生活に影響を与える存在ではないと捉えている様子が読みとれよう。ただ交友関係に関しては、多少役立つと感じているようである。

勉強の仕方、進学、仕事に関して、最も頼りになると考えているのは、(6)の「大学の先生などの専門家」であった。それぞれ82%、77%、63%と絶大の信頼を寄せている。実際には会ったこともないであろう人々に「専門家」と名のつくだけでこれだけの威信を与えているのは、中学生たちが身近に権威らしい権威を感じることはないにしても、自分たちの手に届かない位置にある権威の存在を、彼らなりに感じとっているのかもしれない。ただそれは自分たちを威圧し、はむかうべき権威ではなく、自分には直接無関係だが、何となく信頼するに足る、威厳をもった存在として捉えているように思える。

なお、父親や母親に対する心理的なかかわりの度合は、男女によってかなり様相を異にする。また各々の3年間の変化には、著しいものがある。図15は図14の質問の結果を学年・性別のクロスで表し、その点を分析することを試みた。予想通り、男女別・学年別に大きく差が開いている。

まず「父親」との関係では、1年のころは男女ともかなり相談相手として信頼をおいて

いるが、3年になるとその数値はぐっと落ちている。とくに3年の女子の数値の落ちこみがはげしい。3年間（正確には2年間）の父親離れの傾向は顕著であるといってよいだろう。

「母親」に関しては、父親以上に男女差がはげしい。女子の母親との結びつきは、かなり強い様子が読みとれる。1年から3年になってやはり数値は下がってくるものの、それでも心理的なコミットの度合は高い。男子は1年の段階で、相談相手として母親をさほど頼りにしておらず、3年間の差は女子よりさらに開いている。

それに対し、担任の先生に対する勉強、進路面での信頼は、3年間で逆にアップしている。高校進学などの関連もあろうが、それと共に、1、2、3年と学年が上がるにつれ、子どもたちが威信を感ずる対象が、両親から外部の者へと移行していっていることがうかがえるように思える。

友人については、女子に相談相手として友だちを頼りに思う傾向が顕著である。母親や友人など身近な者に自分の将来のことなどを考えてもらおうとするのは、それだけ周囲に密着した関係を求める女子の特性かもしれない。この項目については、男女共に学年の上の者ほど信頼度を高くしている。

一方で、テレビタレントに関しては、年をとるにつれ、「相談しても役に立たない」と考える子が増えている。ここでも男子よりは女子のほうが思い入れの深さを見せているが、その女子も3年になれば「所詮タレントは夢の中の人物」と悟ってくるようで、3年間で15%ほどの数値の落ちを見せている。社会についての認識がしっかりしてくるにつれて、タレントは気晴らしの対象という感じが定着してくるのであろう。

以上のように、男女とも3年間で少なからぬ意識の変化が見られるが、例外的に学年別の差が出なかったのが、(6)の専門家に対する威信である。自分たちにとって不透明な存在なだけに、意識の変わりようもなかったのかもしれない。3年間を通して、男女とも高い信頼度を寄せている。中でも④の交友関係だけは極端に数値が下がっているが、アイテムのワードが「大学の先生などの専門家」としたので、カウンセラー等の専門家を想定しなかったとも考えられる。しかしながら、自分たちの微妙な日常の問題まで解決してくれるほど、心理的に近い人々ではないと考えていることは事実で、世の中には信頼するに足る高い見識をもった偉い人たちがいるのだろうと、何となく漠然とした権威を想定している様子が読みとれる。

以上のように、ぼんやりと憧れを抱いているタレントはいるが、ぜひその人のようになりたいというほどの思い入れはなく、尊敬する人をあげろと言われれば、両親やそれなりの人の名をあげてみせるが、それも自分にとって十分に相談に足る相手とも思えず、何とかのりこえたい壁でもない。強いて「権威」に類するものをあげれば、社会観の一部を形づくっている偉い人たちが、いるような気がする。けれどもそれほど自分たちにかかわりのある人たちとも思えない、といった中学生たちの姿が描き出されてきた。切羽つまって社会的自立を迫られているわけではない彼らには、是が非でも自分の生き方のモデルを得たいとする願望が生まれてこないのも無理はない気がする。しかし、それではそんな彼らにとって、これから生きようとする社会はどのようなものにうつっているのだろうか。アイデンティティ模索に彼らなりの葛藤はないのだろうか。以下の章ではこれらのことを明らかにしていきたいと思う。

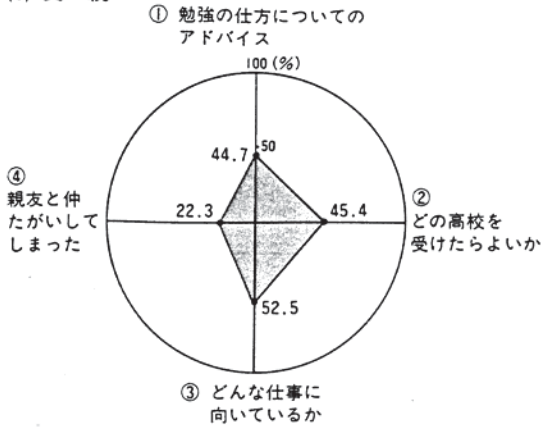
## (図14) 頼りになる相談相手

→尊敬されている割に信頼の薄い父親

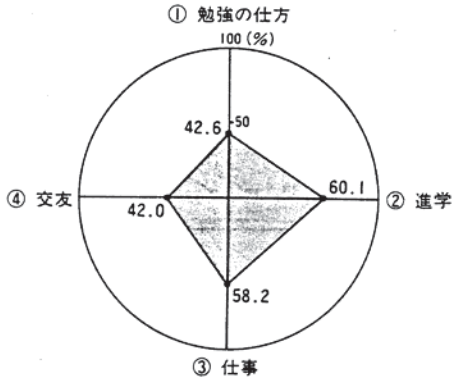
まったく役に立たない 1 ― あまり役に立たない 2 ― かなり役に立つ ③ ― とても役に立つ ④

(%)

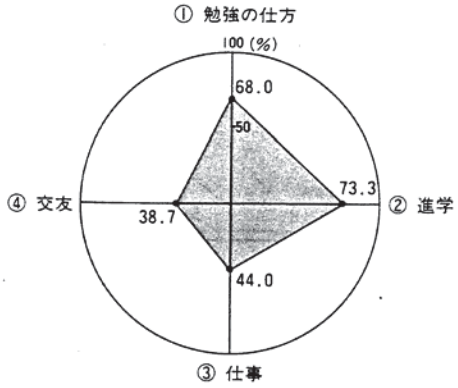
### (1) 父　親



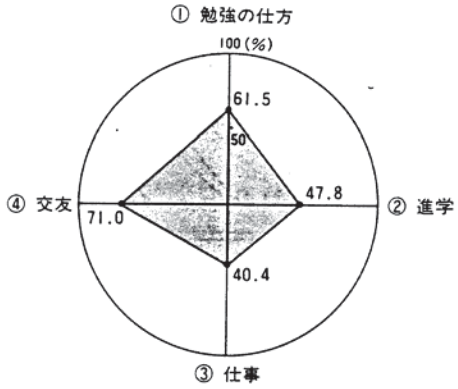

### (2) 母　親



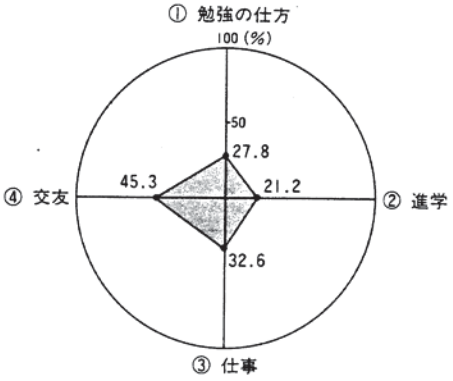

### (3) 担任の先生



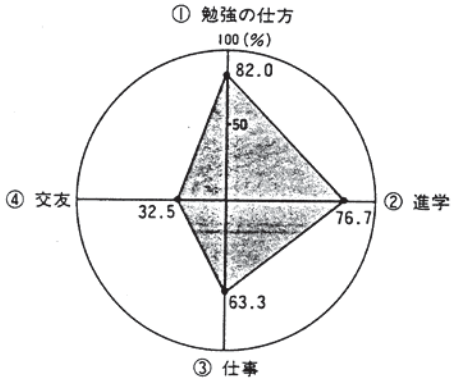

### (4) 仲の良い友だち




### (5) テレビタレント



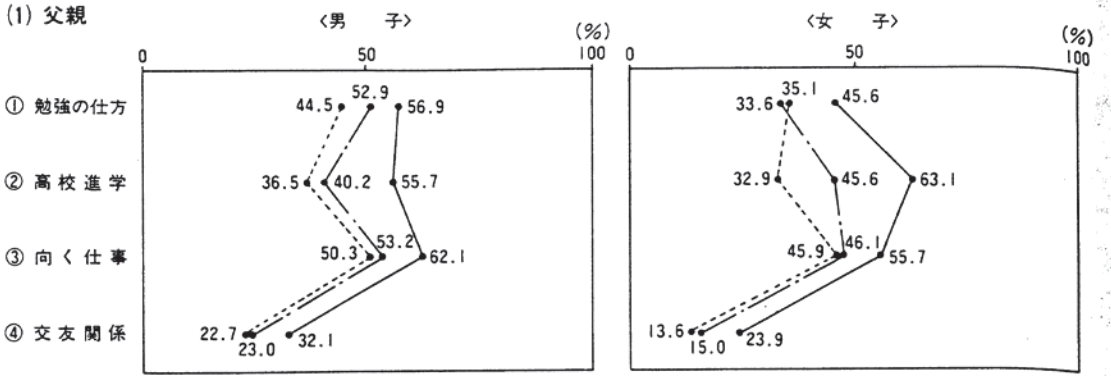

### (6) 大学の先生などの専門家



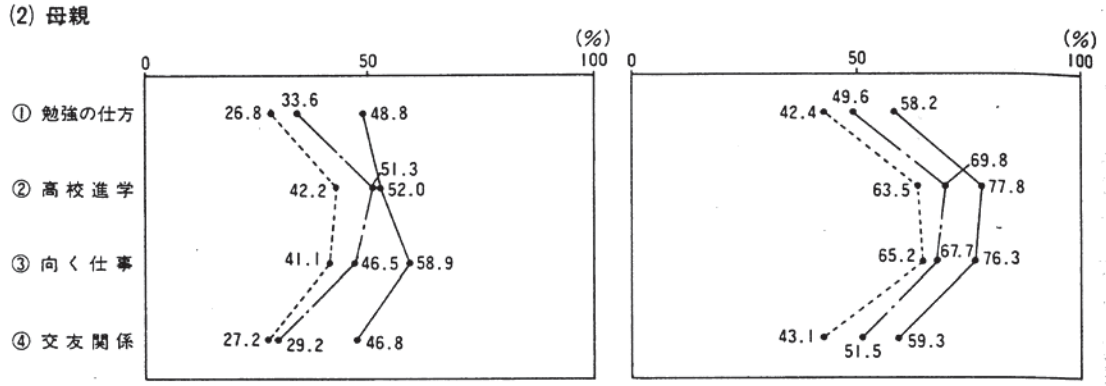
## (図15) 頼りになる相談相手(学年・性別)

かなり / とても 役立つ(%)

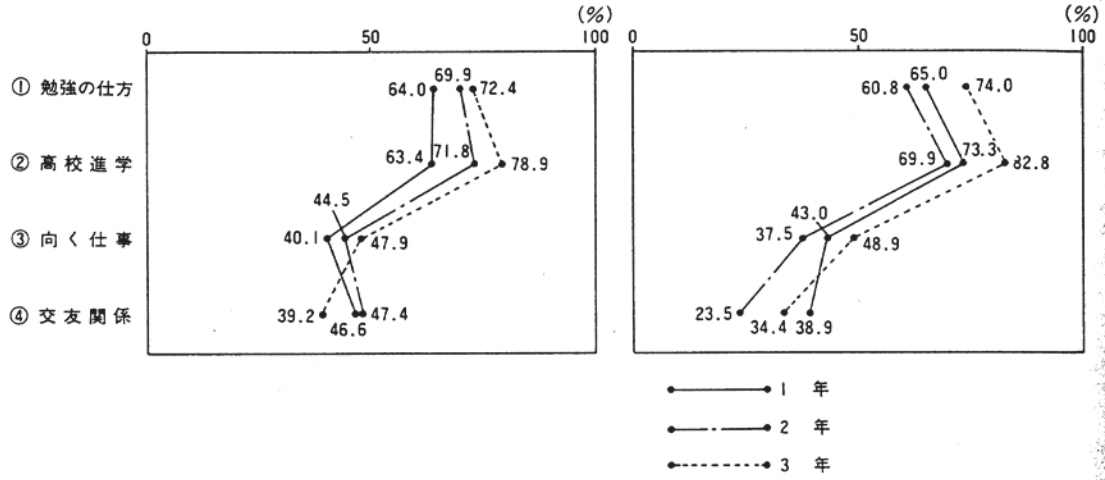
### (1) 父親




### (2) 母親

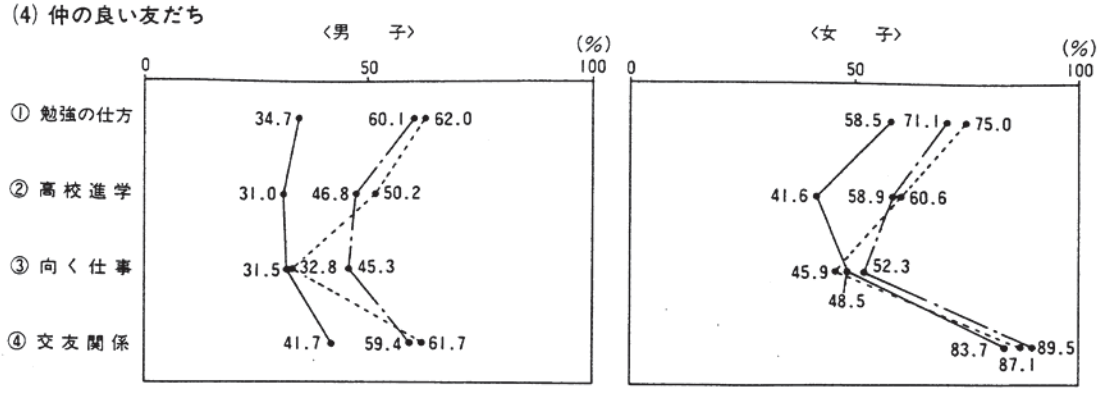



### (3) 担任の先生

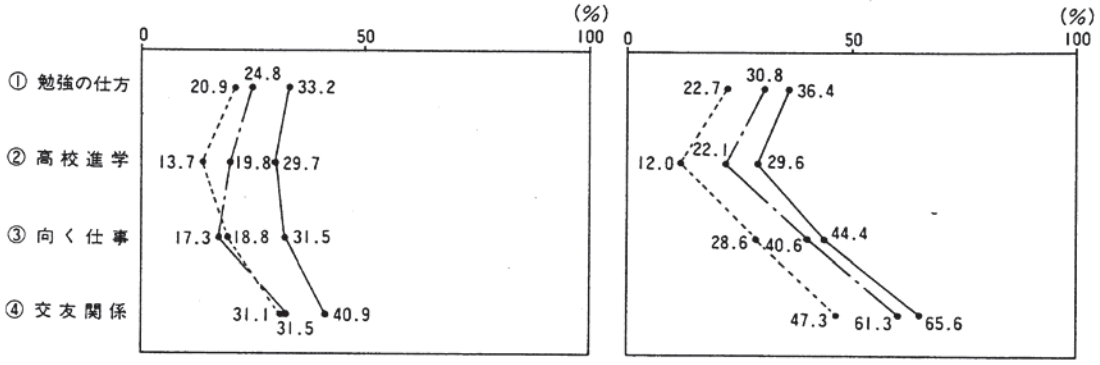


かなり
とても } 役立つ(%)

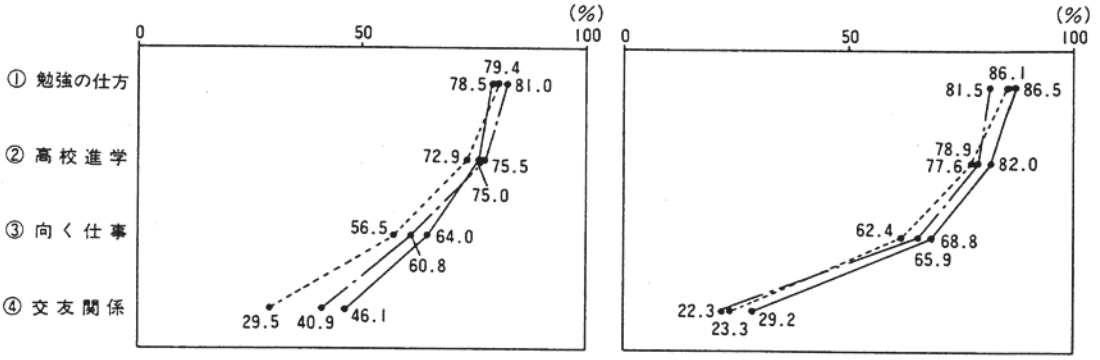
(4) 仲の良い友だち




(5) テレビタレント




(6) 専門家




1 年
2 年
3 年

# 第III章　社会観、将来像と権威

## 1．現代的な自己像と悩み

一部の歌手やタレント、そして親は、生徒たちからいくらか尊敬され、生き方をまねてみたいと思われていた。しかし、生徒たちは、専門家の力は信じているものの、歌手、タレント、親に全幅の信頼をおいているわけではなかった。相手の得意そうな分野では信頼するが、それ以外では冷静な目を保っているように見える。成長のモデルとしての権威はもはや存在していないらしい。そこでこの章では、生徒たちの自己像、社会観、将来像などを分析し、権威をめぐる新しい状況の背景に迫っていくことにしたい。これといったモデルなしに、中学生は自分の将来像をどのように思い描くのだろうか。

まず、中学生の現在について、いくつかデータを見ていこう。まず、自己像について図16に示した。「まったく・かなりそう」の割合が高いのは、「①ひたすら明るく、ときには皆を笑わせる楽しい子」、「②小さいことにこだわらず、いやなことも簡単に忘れられる子」、「③考え方やすることが個性的な子」等である。いかにも現代っ子的な項目が並んでいる。一方、「⑦とてもむずかしいことを深刻に考えている子」、「⑧まじめで皆がさぼっていても、一人でコツコツがんばる子」といった、やや暗めで、こだわるタイプの項目では、「まったく・かなりそう」の割合は低くなる。

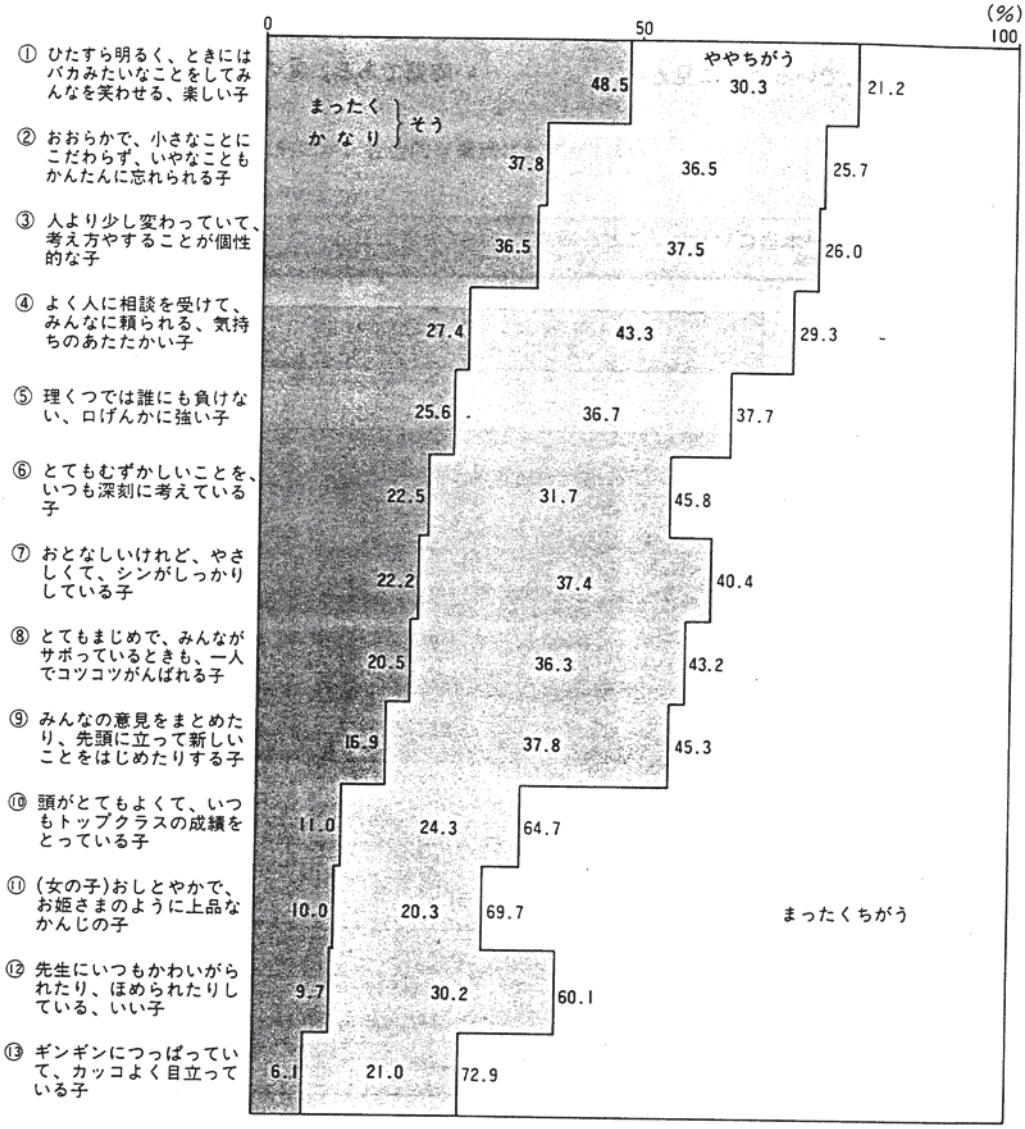
最近の若者気質を語るキーワードのひとつに「デジタル的」という言葉がある。デジタル時計の時刻表示がパッパッと変わっていくように、物事にこだわらず、ファッションから価値観まで場面に応じスピーディに取りかえ、生活を楽しむ。このような行動の仕方が「デジタル的」といわれる。

図16の結果は、中学生たちもかなりデジタル的になってきたのを暗示しているように思われる。こんな彼らは、日常どんなことを思い、悩むのだろうか。興味がわいてくる。

そこで、図17に目を移してほしい。生徒たちが最も考えるのは「①もっとお金があれば好きなことができる」で、57%が「とても・

**(図16) 自己像**

→明るく、こだわらない個性的な子



わりと」考えている。図17の項目はかなり内容の重いものが多いので、どちらかというと気楽なこの項目が上位にくることは予想していた。それにしても、6割近くの生徒が「もっとお金があれば」としょっちゅう考えていることになる。現代の中学生気質の一面を象徴しているといえようか。

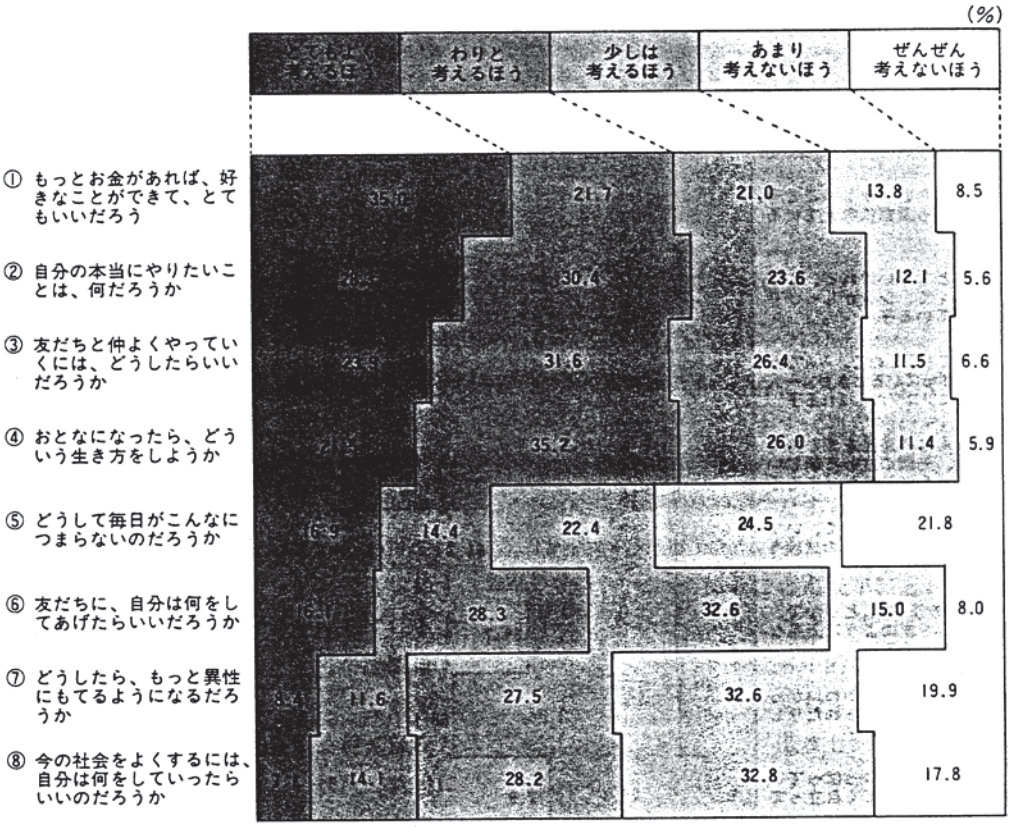
もっとも、「②自分が本当にやりたいことは何か」についても、6割弱の生徒がかなり考えると答えている。また、「④おとなになったらどう生きようか」も、「とても・わりと考える」が57%に上る。生徒たちは、現在の自分、そして将来についても、けっこう考え、そして、悩んでいるように見える。

ところで、「③友だちと仲よくやるにはどうすればよいか」を見ていただきたい。56%の生徒がそうしたことを考えるという。友人との交際が学校生活の楽しさを支えていることは、本シリーズですでに指摘した。友人関係に多くの生徒が心を砕くのは納得できる。「⑥友だちに何をしてあげられるか」も、かなりの生徒が考えているという結果が得られている。

しかし、「⑦どうしたら異性にもてるか」、「⑧社会をよくするため何をしたらよいか」では、考える生徒がぐっと少なくなる。中学生ともなれば、社会に一定の関心が向いてよい時期である。⑧の数値の低さは気にかかる。

**(図17) 悩　み**

→本当にやりたいこと、将来についても考える



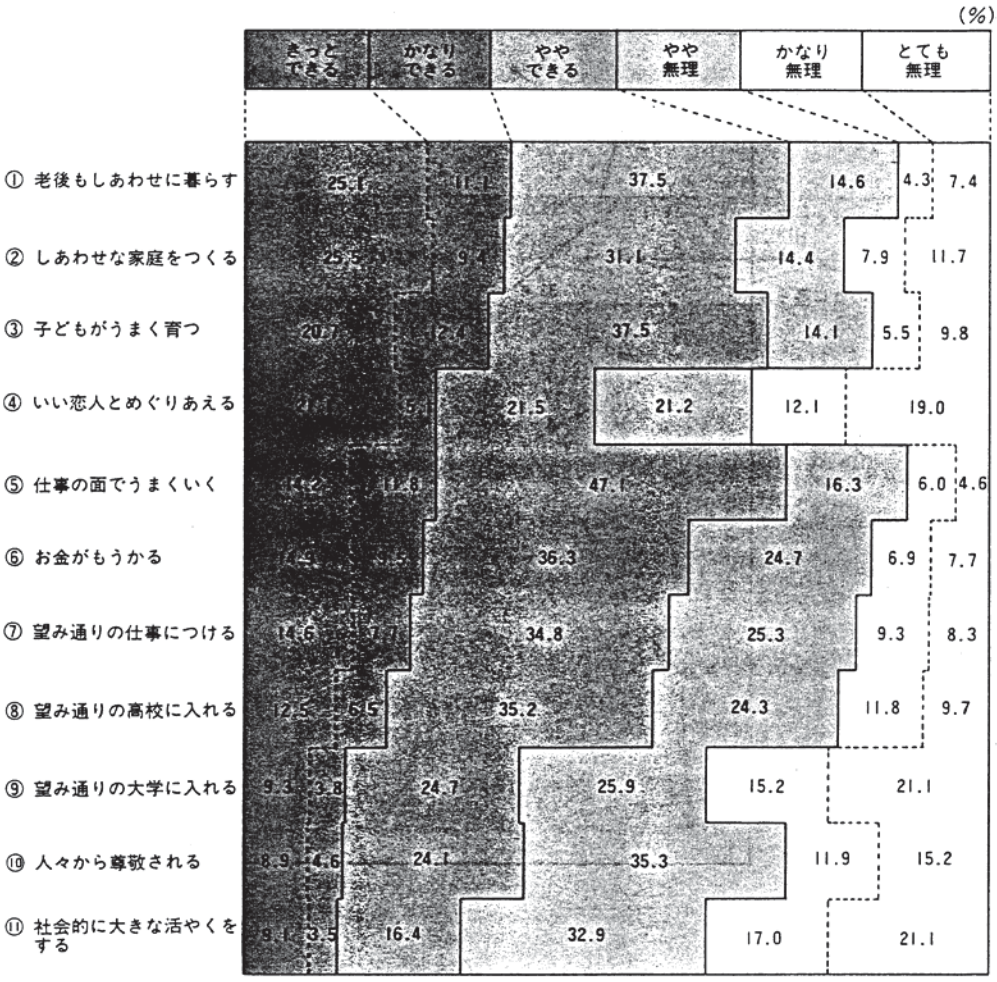
# 2．社会的達成の見通し

生徒たちは、将来についてけっこう考えている、と答えていた。では、彼らは実際どんな将来像を描いているのか。この問題は、本報告の中心テーマである権威と深くかかわっている。なぜなら、憧れ、到達すべきモデルとしての権威は、将来像そのものといえるからである。そこで、まず、生徒の達成の見通しを意欲という観点から、中学生の将来像にアプローチしてみよう。

図18は、将来の見通し全般についてまとめてある。生徒たちは、どちらかというと、楽観的に将来を展望している。「①老後もしあわせに暮らす」では、「やや」も含めると7割以上が「できる」と答えている。以下、「②

（図18）将来展望

→楽観的だが、社会的な達成はむずかしい



しあわせな家庭をつくる」、「③子どもがうまく育つ」、「⑤仕事の面でうまくいく」等でも66～73%の生徒が「できる」といっている。

高校、大学受験については、さすがに見通しが現実的になる。しかし、家庭、子育て、仕事、これらの面ではまあまあうまくいく、と生徒は考えている。

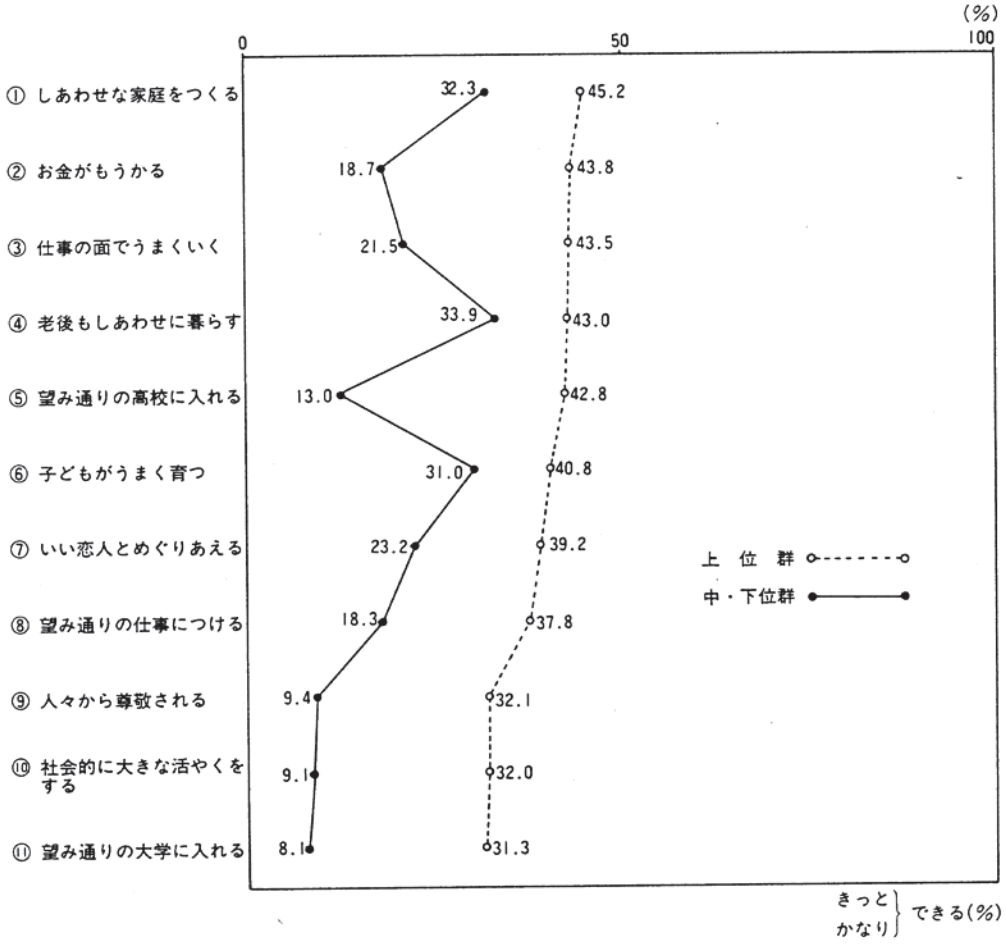
この結果からうかんでくるのは、何かを達成することはさておいて、平凡な一市民としてあたたかな家庭を築いていきたいし、それは可能だろうという将来像である。しかし達成の見通しという視点からは、もう少しビッグな目標をめざしているかどうかが重要になる。

「⑩人々から尊敬される」、「⑪社会的に大きな活やくをする」の結果に注目していただきたい。「尊敬」については、「きっと・かなりできる」合わせて14%しかいない。これが「社会的に活やく」では13%になってしまう。達成のレベルがアップし、社会的な要素が強くなると、生徒の見通しはぐっと暗くなる。

先に明らかにしたように、生徒たちは、社会への貢献についてあまり考えていなかった。そして、今度は社会的な活やくも無理だとい

**(図19) 将来展望×成績**

→上位群の見通しは明るい



う。こうなると、今の中学生は社会に対しどんなイメージをもち、そこでどう生きるつもりなのかが知りたくなってくる。この問題は、後に改めて検討しよう。

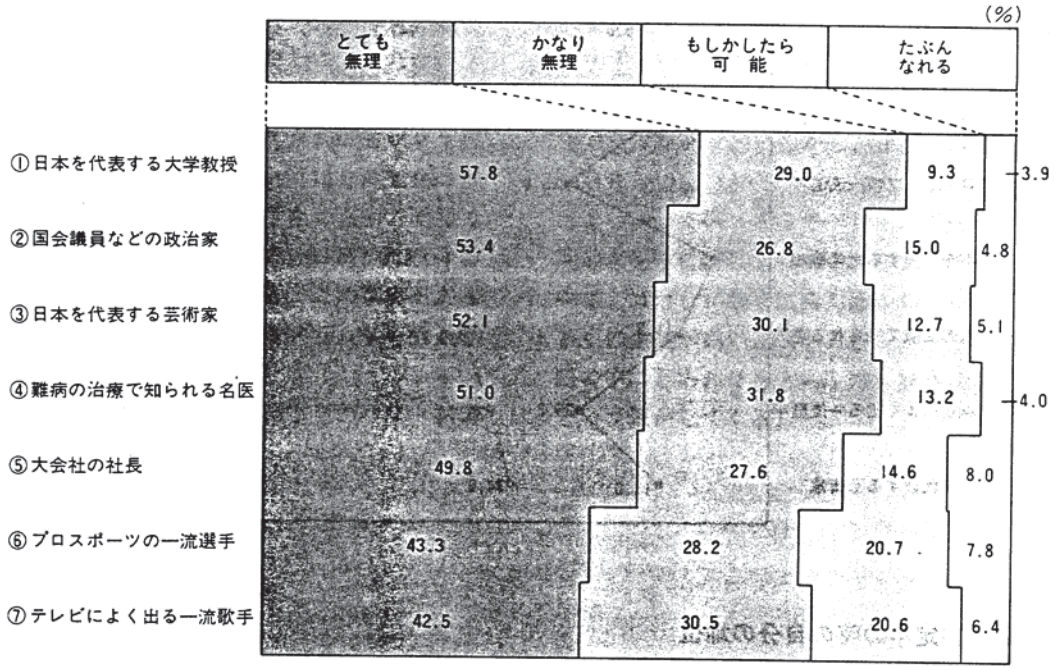
なお、図19には将来展望を成績別に見た結果を示してある。(自己像の項目「頭がよくていつもトップクラスの成績をとっている子」で「まったく・かなりそう」を上位群、「まったくちがう」を中・下位群とした。)図から明らかなように、成績上位の生徒は全ての項目で中・下位の生徒より明るい見通しをもっている。しかし、上位群でも、「⑨人々から尊敬される」「⑩社会的な活やく」では、自信をもっているのは3人に1人である。

もう少し生徒の達成見通しのデータを見ていこう。図20は、「なれるなれないは別として一生懸命がんばれば次の職業につけると思いますか」とたずねた結果である。一見してわかるように、生徒の断念率はかなり高い。「①日本を代表する大学教授」では、6割近くが「とても無理」と答え、「たぶんなれる」はわずか4%にすぎない。断念率が最も低い「⑦テレビによく出る一流歌手」でも、4割以上が「とても無理」と考えている。

相談相手の項目では、「大学の先生などの専門家」の信頼度がかなり高かったが、自分がとうていなれないような偉い先生のアドバイスとなれば、そうした権威に高い信頼を置いたのもうなづけてくる。成長のモデルとしての権威だけではなく、到達不可能な存在としての権威についても検討する必要があるかもしれない。

(図20) 一生懸命がんばったらなれるか

→高い断念率



さて、職業的達成についても、成績との関連を見ておこう(図21)。予想通り、成績上位群のほうが、なれると思っている者の割合が高い。しかし、上位群で最も見通しの明るい「大会社の社長」でも、可能性があると考える生徒は半数に満たない。

もっとも、ここにあげた「一流の」あるいは「日本を代表する」職業人になるのは、たしかに容易なことではない。したがって、断念率が高くても無理のない部分もある。そこで、質問を変え、大会社に定年まで勤めたらどのくらいの地位につけると思うか、たずねてみた。社長は無理でも、重役、せめて部長くらいはなれる。このくらいの気持ちはもっていてほしいところである。

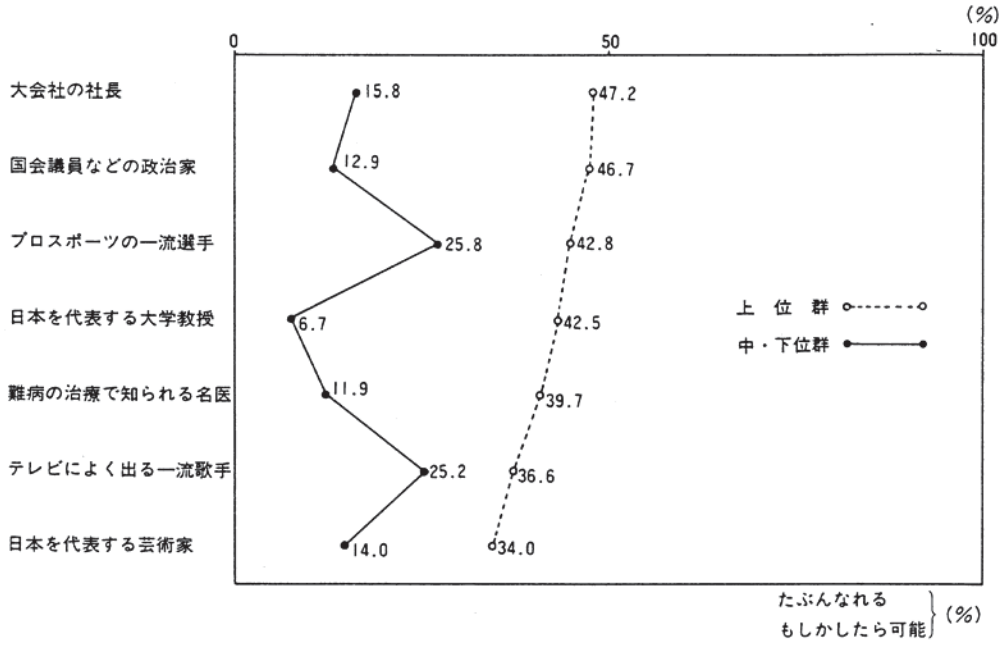
図22にあるように、ほぼ半数が部長以上の地位につけると思っている。が、一方、平社員、係長どまりと考える生徒も26%いる。中学生の見通しとしては、あまりにさびしくないだろうか。

以上見てきたように、生徒たちは、家庭生活はまあやっていけると思っている。しかし、達成の場面が家庭から社会、職場へ出てくると、「無理だ」という気持ちが強くなる。

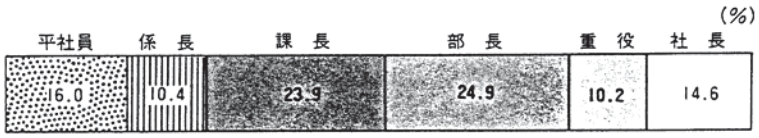
かつては、多少身のほど知らずでも、ビッグな人物を目標として青年は努力する、という姿があった。しかし、達成意欲に乏しく、将来はせいぜい課長か部長までという中学生に、ビッグな人物をめざして努力する姿を求めても、ないものねだりとなろう。

**(図21) がんばったらなれるか×成績**

上位群は見通し明るい




**(図22) 定年の時の自分の地位**



# 3．社会観との関連

家庭はともかく、社会での達成を断念している生徒たちは、今の日本の社会をどう見ているのだろうか。**表3**に、今の世の中をどう思うかたずねた結果を示してある。

肯定率が最も高いのは「①競争がはげしい」で、「とてもそう言える」だけで45%、「かなり」も合わせると75%に上る。生徒たちは、高校受験という非常に競争的なイベントをひかえている。「競争がはげしい」は、おとなの社会のイメージというよりは、自分たちの実感であろう。

次いで肯定率が高いのは「②自分勝手な人が多い」で、65%が「とても・かなりそう言える」としている。生徒たちはおとなのどういうふるまいを見てこのように感じているか、気になるところである。「③金持ちの意見が通りやすい」も肯定率64%であるが、これはマスコミの影響が大きいかもしれない。

「④勉強ができる人間が得をする」の肯定率も高い（61%）。勉強ができれば金がもうかり高い地位につける、というほど実社会は単純ではない。しかし、中学生の当面の問題である高校受験で、いわゆるいい高校に行けるのは成績がよい生徒である。この事実がある限り、生徒は勉強ができるメリットを強く感ぜざるをえないだろう。

中学生は、金と成績にかなりのパワーを認めている。一方、損をするのは正直者、と生徒は感じている。「⑦正直な人が損をする」を半数が肯定している。これが、おとなの社会についてのイメージにとどまらず、生徒自身の日常生活の中から出てきた感覚だとすると、問題は非常に大きいように思える。

この他では、「⑤世代間の意識のギャップ」、「⑥規則の多さ」、「⑧価値観の不安定さ」等が46～60%の賛同を得ている。

調査では、現代社会のよい面と思われる点についてもたずねている。しかし、それらの項目の肯定率は、いずれも低い数値にとどまっている。――「⑪多くの人がまあまあしあわせ」（「とても・かなりそう」28%）、「⑭とても自由に生きられる」（同17%）、「⑮〝やさしさ〟をもった人が多い」（同16%）。

中学生が見た現代社会は、かなりハードでダーティなものであった。彼らの思い描く社会で成功するには、お金があり、勉強ができなければならない。しかも、正直にはやっていられない。それでも自由にできるならばまだよいが、規則・きまりが非常に多い。世代間のギャップ等にも悩まされる。このような中で、はげしい競争に勝ち抜かねばならない。多くの生徒が高い達成をあきらめ、せめて家庭の中にしあわせをというのも無理はない、という気がしてくる。

（表３）社会観 ――今の世の中についてどう思うか――

└――→競争がはげしく、自分勝手な人が多い

（%）

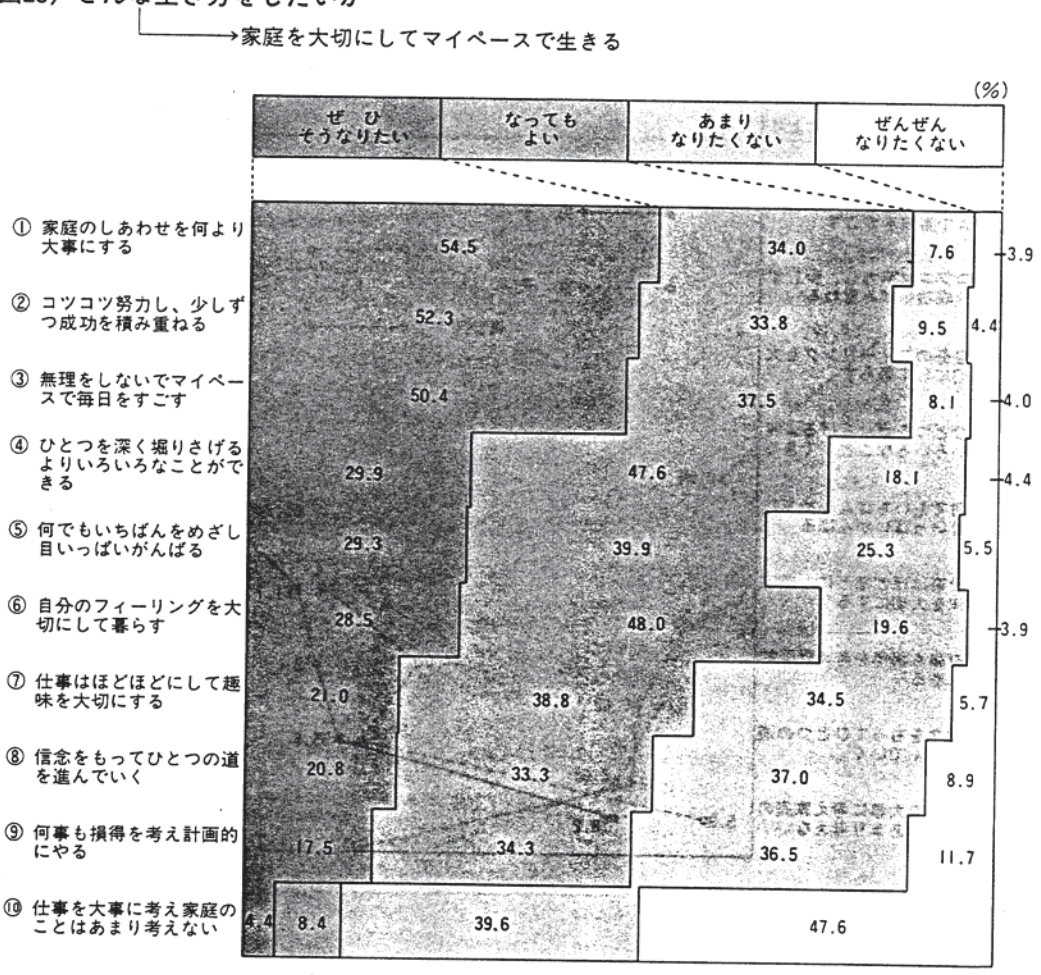
| 尺度 / 項目 | とても そう言える | かなり そう言える | やや そう言える | あまり そう言えない | ぜんぜん そう言えない |
|---|---|---|---|---|---|
| ① 競争がはげしい | 44.8 | 29.7 | 17.6 | 5.2 | 2.7 |
| | 74.5 | | | 7.9 | |
| ② 自分勝手な人が多い | 35.1 | 30.2 | 26.6 | 6.4 | 1.7 |
| | 65.3 | | | 8.1 | |
| ③ 金持ちの意見が通りやすい | 35.8 | 28.3 | 20.3 | 11.5 | 4.1 |
| | 64.1 | | | 15.6 | |
| ④ 勉強ができる人間が得をする | 33.6 | 27.2 | 23.5 | 12.5 | 3.2 |
| | 60.8 | | | 15.7 | |
| ⑤ おとなと若者の考え方がぜんぜん合わない | 34.5 | 25.5 | 27.2 | 10.2 | 2.6 |
| | 60.0 | | | 12.8 | |
| ⑥ 規則やきまりが多すぎる | 34.9 | 22.9 | 26.1 | 12.4 | 3.7 |
| | 57.8 | | | 16.1 | |
| ⑦ 正直な人が損をしている | 26.2 | 24.7 | 29.2 | 14.8 | 5.1 |
| | 50.9 | | | 19.9 | |
| ⑧ 何が正しいことなのか、はっきりしていない | 23.7 | 22.2 | 35.8 | 14.9 | 3.4 |
| | 45.9 | | | 18.3 | |
| ⑨ 信頼し合う気持ちが失われてきている | 17.6 | 24.6 | 40.0 | 14.0 | 3.8 |
| | 42.2 | | | 17.8 | |
| ⑩ 社会全体がなんとなくゆるんでいる | 16.3 | 19.1 | 39.0 | 21.2 | 4.4 |
| | 35.4 | | | 25.6 | |
| ⑪ 多くの人がまあまあしあわせに暮らしている | 9.0 | 18.7 | 37.1 | 25.8 | 9.4 |
| | 27.7 | | | 35.2 | |
| ⑫ なんとなく暗い | 11.3 | 12.5 | 31.2 | 34.9 | 10.1 |
| | 23.8 | | | 45.0 | |
| ⑬ それほど努力しなくとも、ふつうの生活はできる | 7.5 | 10.0 | 33.1 | 35.3 | 14.1 |
| | 17.5 | | | 49.4 | |
| ⑭ とても自由に生きられる | 6.2 | 10.4 | 23.2 | 44.2 | 16.0 |
| | 16.6 | | | 60.2 | |
| ⑮ "やさしさ"をもった人が多い | 6.0 | 9.5 | 30.1 | 42.6 | 11.8 |
| | 15.5 | | | 54.4 | |

# 4．家庭第一主義の将来像

中学生は、現代社会を相当に手強いものと見ている。このイメージが、生徒の達成意欲をそぎ、従来の成長のモデルとしての権威を成立しにくくしている。モデルが見いだせないまま、生徒たちは将来の生活をどのように思い描いているのだろうか。最後にこの点を検討しよう。

図23によると、将来の生き方として、55%もの生徒が「①家庭のしあわせを何より大事にする」と答えている。「なってもよい」を含めると、9割近い生徒が、将来は家庭を最も大切にするといっている。厳しい社会から

（図23）どんな生き方をしたいか



の避難場所として家庭が選ばれているらしい。

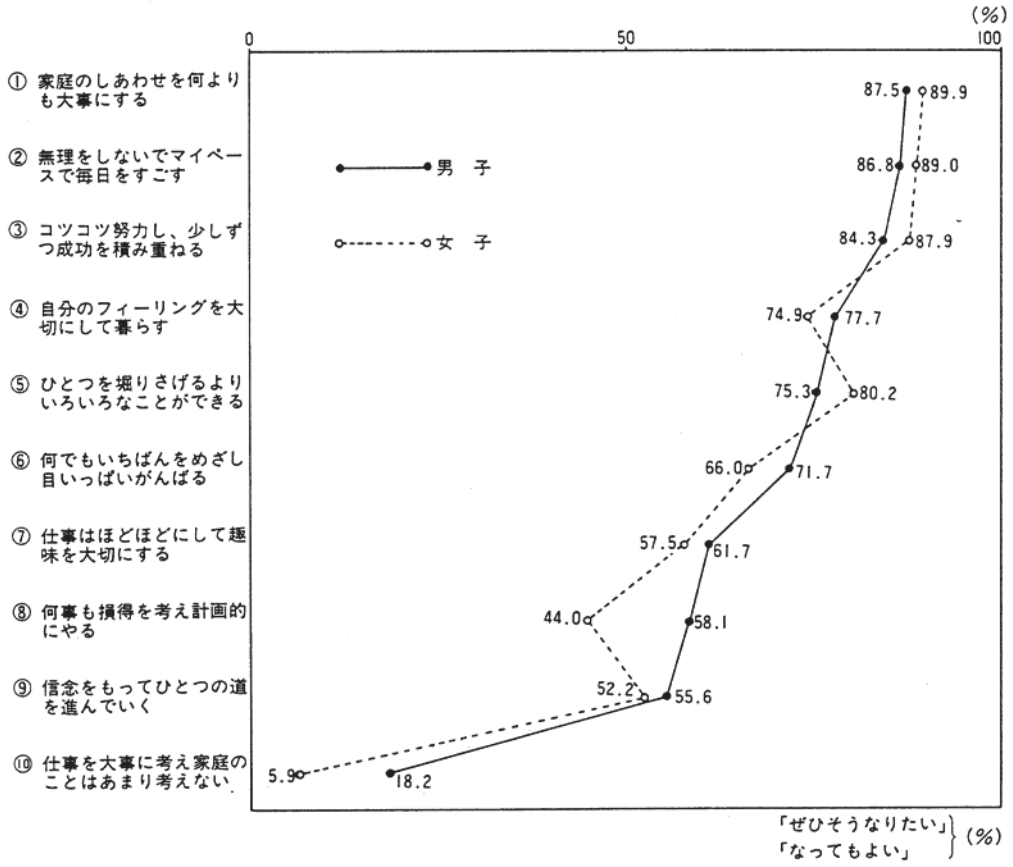
次に、「②コツコツ努力し少しずつ成功を積み重ねる」が52%の支持を得ている。一方、内容的にこれと対になる「⑤何でもいちばんをめざし目いっぱいがんばる」の支持は29%にとどまる。高い目標を定めて一直線に進み途中で挫折するよりは、あわてず一歩一歩堅実に行こう、という姿勢がうかがえる。「③無理せずマイペース」について、半数の生徒が「ぜひそうなりたい」と答えているのも、この姿勢の反映といえよう。

また、「④いろいろなことができる」と「⑧信念をもってひとつの道を進む」を比べると、「ぜひそうなりたい」「なってもよい」の合計が、④——78%、⑧——54%となる。ひとつのことに打ち込むのは、やはりはやらないらしい。

図23で示された様々な生き方は、家庭や仕事に深くかかわっている。項目によっては男女でかなり差がでると思われる。ところが、図24を見ると、予想に反し男女間で大きな差は見られない。

**(図24) 将来の生き方×性別**

→男女間の差は小さい

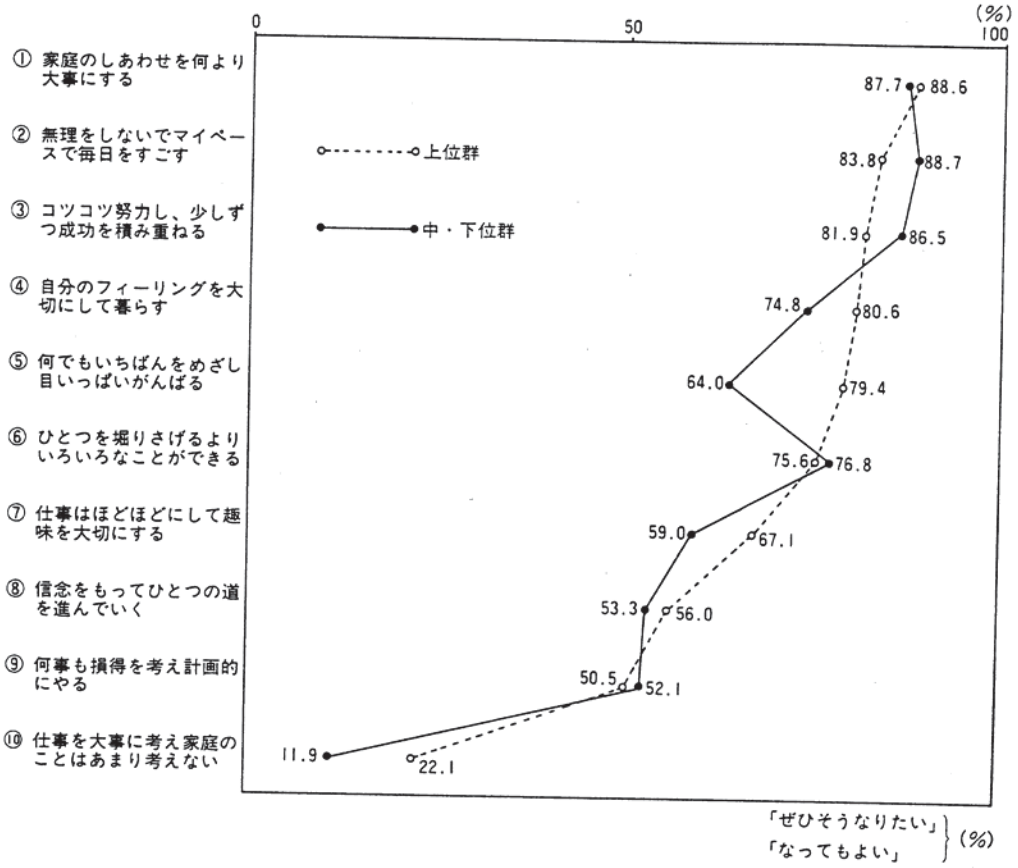


さらに、成績との関連でも、同様のことがいえる（図25）。成績上位群と下位群で数値が大きく異なるのは、「⑤いちばんをめざし目いっぱいがんばる」の１項目のみになっている。家庭第一、マイペース、多様な活動という傾向は、性別、成績を越えて現代の中学生に深く浸透していることがわかる。

家庭を大切にし、無理せずマイペースでいろいろなことをやる。生徒たちの描く生き方は、若者の将来像としては何とも物足りない。しかし、ハードな現代社会を生きていく上では、彼らなりの自衛策なのかもしれない。さて、本報告の中心テーマ〝権威〟の視点からいうと、強力な家庭志向には、高い到達モデルとなる権威は不要であろう。強いてモデルを探すとすると、家庭人としての親しか見当たらない。II章で尊敬する人として親が多くあがった理由は、このあたりにあるのではないだろうか。いずれにしろ、今後の中学生にとっての権威の問題は、親のあり方にかかっているように思えてならない。

（図25）将来の生き方×成績

→成績による差は小さい



# 〔まとめに代えて〕

## モデル喪失の時代

現代は、モデルなき成長の時代なのだろうか。かつては、野球選手やマンガ家等に強い憧れを抱き、彼らをめざし努力を重ねる、という成長のスタイルがたしかに存在していた。傍目には高望みでも、本人は真剣にがんばる。それは、若者だけに許される特権だったように思える。しかし、本報告で見てきたように、残念ながら、この成長のモデル、成長を導く星としての権威は、もはや存在していないように見える。

今の中学生たちも、歌手やタレントを一応評価している。しかし、彼らは成長のモデルというより、見て楽しむ対象というのである。そして、勉強や進路のことなら親や教師に頼っている。そして、ばく然とした形で専門家の権威は認めているものの、全体としてみると、生徒たちがマスメディアより、パーソナルな関係に頼って生きていこうとしているのがわかる。情報化社会を迎えて新しい成長のスタイルが、出現しつつあるのではと予想していた。しかし、権威との関連については、目標喪失という新しさは見いだせるものの、全体としてみるとむしろ、古さをとどめていた。

## 権威の行方と親の役割

もっとも中学生が成長の引っぱり役としての権威をもたないことは、中学生の社会イメージと関連している。大きな社会の中で成功するのは容易ではない。つまり、成功者（かつての権威）は、到達不可能な雲の上の存在になってしまった。生徒たちは高い達成をあきらめ、未来の心の拠り所を家庭に求める。したがって、このような中学生たちは、成長のモデルとしての権威を抱きにくい。

権威の喪失は、生徒の成長に大きなゆがみを生じさせるのだろうか。今回のデータで見る限り、生徒たちは、現代っ子特有のこだわりのなさで未来を見つめ、そこそこのしあわせをつかめると信じている。かつての若者のように、すべてがビッグな目標をめざせば良いとも思えないので、こうした未来像も、安定した社会の中でのひとつのスタイルなのかもしれない。しかし、大多数の生徒が権威への達成を断念しているのに、ごく少数ながら、成績上位層を中心に、権威への達成をめざす姿が見受けられる。いわば、エリート候補層である。

データを読んでいるうちに、マイホーム的な大衆と意欲に富んではいるが、ややエゴイステックなエリートという二元化された社会像がうかんできた。しかし、その社会では、エリート派が、マイホーム派の夢をつぶしてしまう可能性が強い。したがってマイホーム派も、それなりの社会像をもち、伝統的なビッグなものでなくとも権威への達成をめざすべきであろう。

タレントは目標にならないし、親たちも、中学３年生ともなると、目標になりにくい。しかし、専門家にはなれそうもない。とすると、生徒たちは何を目標としたらよいか。

現在の目標喪失に代わって、マイホーム派にどんな希望を与えたらよいか、おとなたちが真剣に考えてよい問題であろう。

※おことわり　本文中に使用した写真は、本文・テーマとは一切関係ありません。